

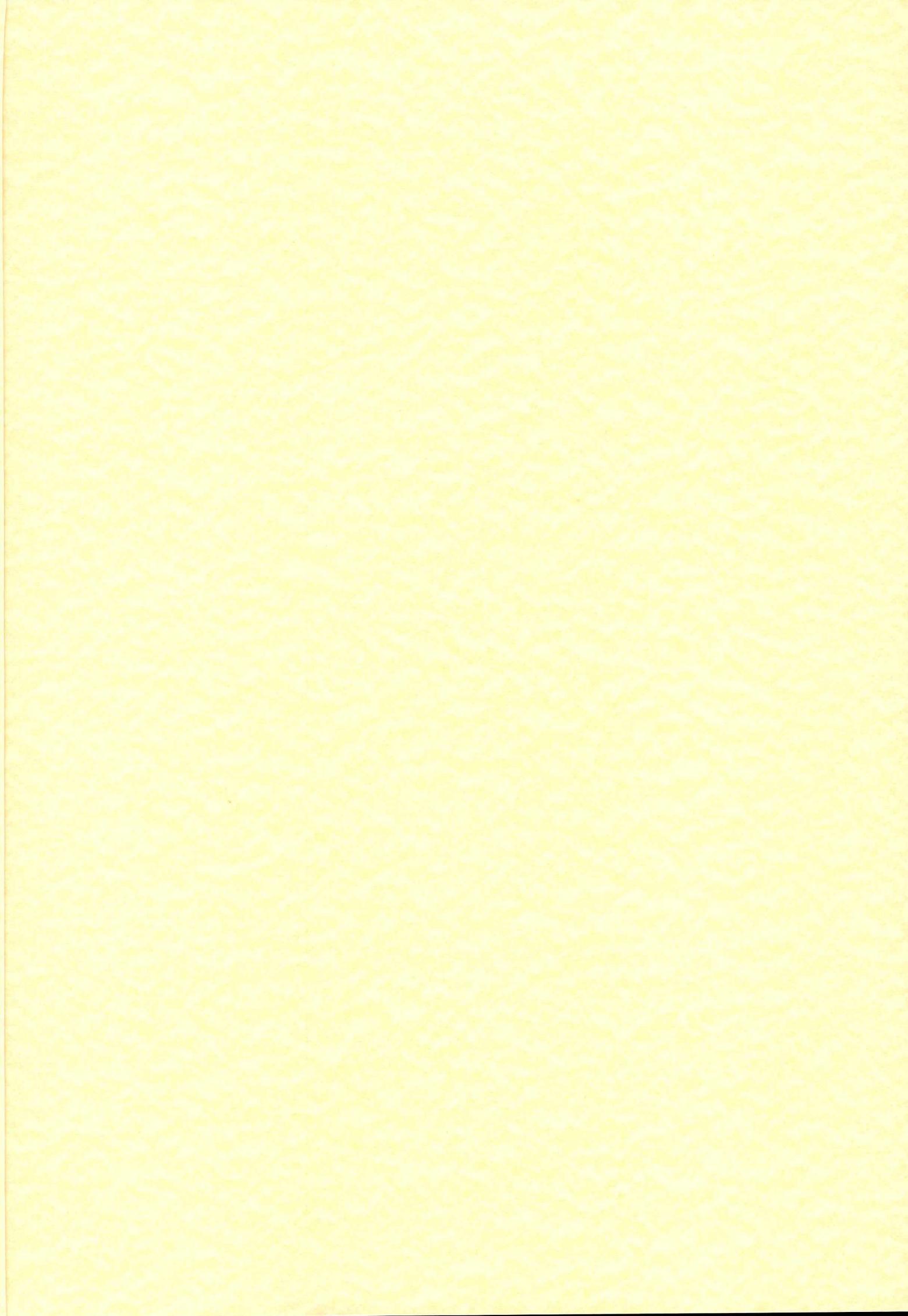
大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

VI

2008.2

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

VI

2008.2

財団法人 大阪市文化財協会



豊臣期の石垣(南東から)

大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

VI

2008.2

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪は上町台地と大川付近を中心として繁栄してきた。大川は、もとは淀川の本流であり、古くは古墳時代に開かれた運河である「難波堀江」までさかのぼることができる。以来、天満の南から西方は「難波津」あるいは「渡辺津」などと称され、港湾として大阪の発展を支えてきた。

16世紀末、豊臣秀吉は大坂城を築く際、当時最大の教団であった本願寺を天満に呼んだ。これが天満本願寺であり、造幣局の敷地がその有力な候補地となっている。

1993年度以来、この地で行ってきた発掘調査はすでに7次を数える。その結果、当地の開発が16世紀末ごろからであること、石垣で造成された大規模な屋敷地があったことなどが判明してきた。

本書は2006年度の発掘調査の結果を報告するもので、造幣局構内で行った調査の6冊目の報告書となる。調査ではあらたな石垣と屋敷地が発見された。「幻の本願寺」が次第に姿を現しつつあるかのようである。

発掘調査の実施と報告書の作成に多大なご協力をいただいた独立行政法人造幣局に対し、心からお礼申し上げる次第である。

2008年2月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が独立行政法人造幣局(北区天満1丁目1番地)の委託を受け、2006年10月に実施した「工業用水・上水設備棟新築その他整備工事に伴う埋蔵文化財調査」(TN06-1)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、造幣局が負担した。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長(兼、調査担当課長)南秀雄の指揮のもとに調査担当課長代理松尾信裕(現大阪城天守閣館長)があたり、報告書作成は松尾の助言のもとに文化財研究部長原調査事務所長積山洋が行った。英文目次の作成に際しては、ボストン大学大学院博士課程牧野薰氏の助言を得た。

一、遺構写真は松尾が撮影し、遺物写真の撮影は阿南写真工房に委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 本書における遺構名の表記は、溝(SD)、土壙(SK)、ピット(SP)、井戸(SE)、堀・柵(SA)、石垣・土手(SW)、他の遺構(SX)の略号を冠した。
2. 遺構番号には遺構検出面に対応する3桁の番号を付した。また遺物番号には1から順に通し番号を付した。
3. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。方位は座標北、水準点はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと略称している。
4. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。
5. 本報告書で使用する中近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。これは一般的な時期区分とは異なるが、記録に残る火災や築城に伴う大規模開発に対照しうる地層を鍵層にして出土遺物を検討した結果得られたものであり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

大坂本願寺期	1496～1580年	大坂御坊創建(明応5年)～本願寺焼亡(天正8年)
豊臣前期	1580～1598年	本願寺焼亡～大坂城三ノ丸築造開始(慶長3年)
豊臣後期	1598～1615年	三ノ丸築造～大坂夏ノ陣(慶長20年)
徳川期	1615～1867年	大坂夏ノ陣～大政奉還(慶応3年)

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過 1

第Ⅱ章 調査の結果 3

 第1節 層序 3

 第2節 豊臣期の遺構と遺物 7

 1) 第9層以前の遺構と遺物 7

 2) 第7・8層の遺構と遺物 7

 3) 第5層の遺構と遺物 10

 第3節 徳川期の遺構と遺物 14

 1) 第3層の遺構と遺物 14

 2) 第1・2層の遺構と遺物 16

 第4節 天満地域の遺跡と本願寺跡の遺構変遷 24

 1) 天満地域における本願寺前史 24

 2) 天満本願寺跡の遺構変遷 25

引用・参考文献 29

あとがき・索引

英文目次

原色図版目次

調査地全景

(南から)

図 版 目 次

- 1 調査地全景
　上：調査地遠景(北から)
　下：調査地近景(南から)
- 2 豊臣期の遺構(一)
　上：石垣SW901(南東から)
　下：石垣SW901(北東から)
- 3 豊臣期の遺構(二)
　上：石垣SW901(東から)
　下：手前より土手SW801と石垣SW901(北から)
- 4 豊臣期の遺構(三)
　上：石垣SW901の北端(北東から)
　下：土手SW801(北から)
- 5 豊臣期の遺構(四)
　上：石垣SW901の細部(北東から)
　中：石垣SW901の細部(東から)
　下：石垣SW901の細部(東から)
- 6 豊臣期の遺構(五)
　上：石垣SW901の断面(南から)
- 中：石垣SW901の断面(南から)
　下：土手SW902の断面(西から)
- 7 豊臣～徳川期の遺構
　上：土手SW902基底部の礎石(北西から)
　中：石垣SW901の東側
　　第6・7・10層と転石(南から)
　下：第3層上面の小溝群(北東から)
- 8 徳川期の遺構
　上：SD202(東から)
　中：SD201(東から)
　下：SD201とSD202の重なり(東から)
- 9 豊臣期以前の出土遺物(一)
- 10 豊臣期以前の出土遺物(二)
- 11 徳川期の出土遺物(一)
- 12 徳川期の出土遺物(二)
- 13 徳川期の出土遺物(三)
- 14 徳川期の出土遺物(四)

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置	1
図2 天満本願寺跡とその周辺の遺跡	2
図3 調査地の位置	2
図4 調査地の地層模式図	3
図5 東西地層断面実測図	4
図6 南北地層断面実測図	4
図7 主要遺構と断面図記録位置図	5
図8 繩文土器実測図	7
図9 第9層の遺構実測図	8
図10 石垣SW901立面実測図	9
図11 土手SW902等断面実測図	10
図12 第7・8層の遺構実測図	11
図13 SW801断面実測図	12
図14 第5層の遺構実測図	12
図15 豊臣期の遺物実測図	13
図16 第3層の遺構実測図	15
図17 第3層出土遺物実測図	16
図18 第2層の遺構実測図	17
図19 SD201実測図	18
図20 SD202実測図	19
図21 SD201・202断面実測図	19
図22 SD201・202出土遺物実測図	20
図23 SK203～206出土遺物実測図	21
図24 第1・2層出土遺物実測図	22
図25 豊臣前期の屋敷地	26
図26 豊臣後期の屋敷地(1)	27
図27 豊臣後期の屋敷地(2)	28

写 真 目 次

写真1 第7層の堆積状況	6
--------------	---

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪城のある上町台地より大川(旧淀川)を北に越えた天満地域の東端に当り、東と南には淀川の旧本流であった大川が南流し、大きく湾曲して西に流れている(図1)。天満地域には天満本願寺跡以外に、北に同心町遺跡や西には天神橋遺跡等がある。北にある同心町遺跡は弥生時代の集落が拡がっている遺跡で、西の天神橋遺跡は古墳時代から近世までの遺構が確認されている(図2)。ここに報告する造幣局構内では、これまで6度にわたる発掘調査を行っており、中世から近世の遺構が見つかっている(図3)。

造幣局構内では、最下層に中世の遺物を包含する地層が堆積していることは確認されているが、同時期の遺構は見つかっていない。しかし、その上層に安土桃山時代の天満本願寺に係わる、大川沿いの敷地境と考える石垣や敷地内の建物群が見つかっており、豊臣期における当該地の敷地利用状況が判明している。また、その後の江戸時代になると、構内全域にわたって廃棄土壌が多数発見されており、近世全般を通じて活発な土地利用が行われている。

それ以外では、今回調査地の南西約300m付近でTN04-1次調査[小田木富慈美2004]が行われている(図3)。ここでは古墳時代中期に遡る竪穴建物や掘立柱建物が見つかり、その後の平安時代から室町時代にも2時期に及ぶ遺構面を確認している。さらに、その上位には中世末から近世初頭の遺構が拡がっていた。

今回の調査地点は図3に示したとおりであるが、1993・1995年度に造幣局構内で発見された石垣の北延長線上に位置しており、同様の遺構が発見されると予想された。そのため、大阪市教育委員会文化財保護担当による試掘調査が2006(平成18)年6月27日に行なわれ、地表下2.2m付近に近世初頭の遺物包含層が確認された。その結果を受けて、今回の工事範囲で本調査を行なうこととなったものである。

調査に先立ち、重機による表土掘削の深度を確認すべく、9月26日から4日間の日程で調査地の数箇所で表土の厚さを確認する掘削作業を行った。

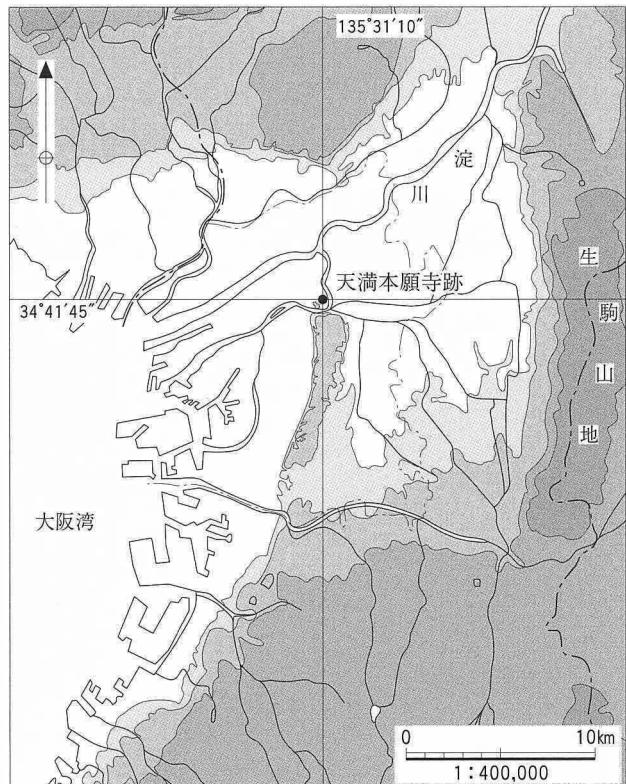


図1 遺跡の位置

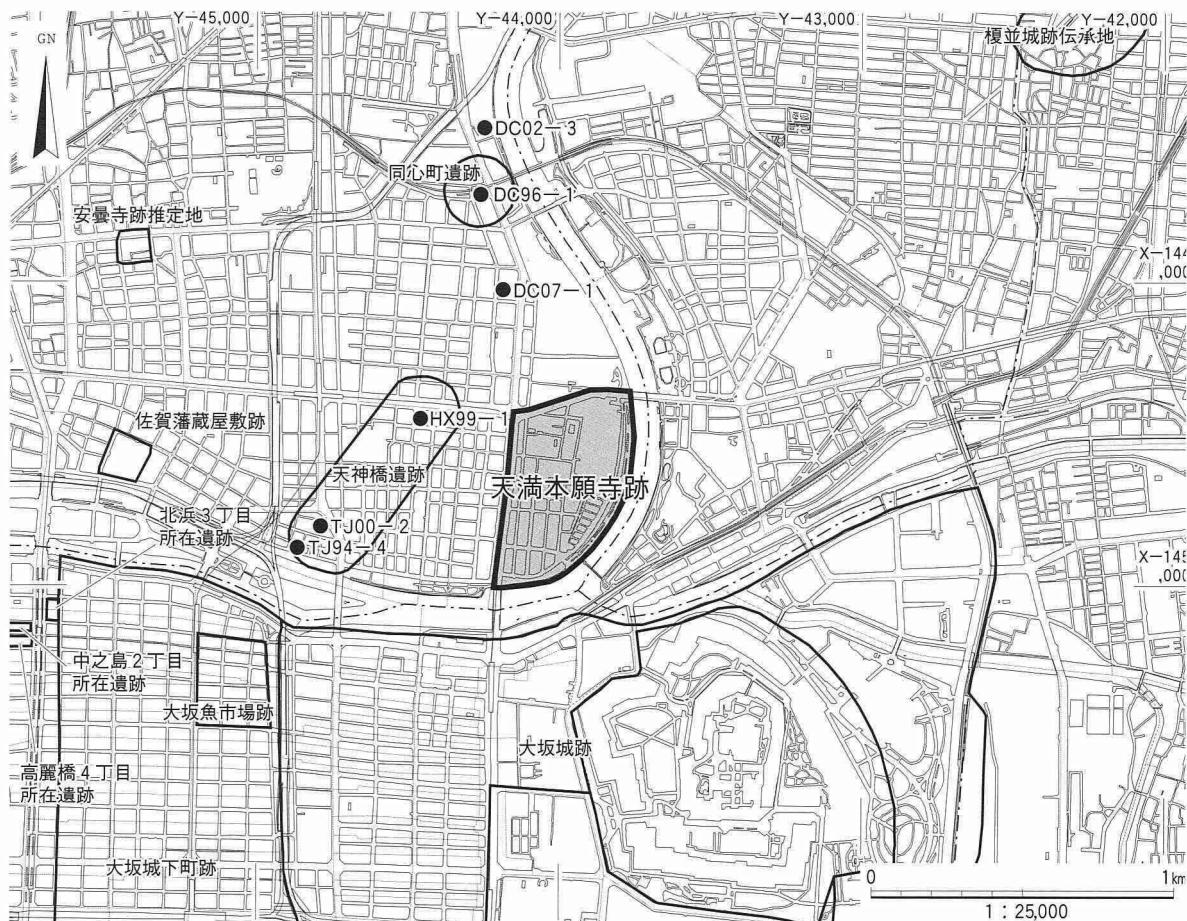


図2 天満本願寺跡とその周辺の遺跡



図3 調査地の位置

表土の掘削は、降雨により1日遅れて、10月6日から着手した。その後、人力による掘削を行ない、多くの遺構や遺物を確認し、10月28日に調査を終了した。なお、調査終了の前日である10月27日に、造幣局職員を対象とする現地公開を行い、210余名の参加を得た。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

今回の調査では最下層に大川が形成した自然堆積層を確認し、その上位に豊臣期の整地層を検出した。整地層は大きく2時期に分かれ、それに伴って大川の護岸施設となる石垣や土手を確認した。さらに上位には徳川期の整地層があり、それを削平する近代以降の盛土が拡がっていた(図4～6)。以下に各層の概略を述べる。

第1層：近代以降の盛土や攪乱層で、西部では地表下1.8m付近まで、東部では地表下2.2m付近まで堆積していた。

第2層：近世後半の整地層で、4層以上に細分できた。上位から青灰色シルト質中粒砂層・黄色細粒砂層・灰色シルト質細粒砂層・灰褐色細粒～中粒砂層である。最下層は石組溝SD201より南部で確認した。SK203～206は本層最上層の上面から掘込まれた遺構である。花崗岩の大きめの石を積上げた石組溝SD201も同じ面から掘込まれていた。SD201の下層には自然石を積上げた石組溝SD202が同じ位置に重なって検出された。この石組溝SD202の正確な掘込み面は上位のSD201の掘形で削平されおり、判明しなかった。

第3層：暗灰褐色を呈する焼土混りのシルト質細粒砂層で、西部では薄いが、東部では後述する敷地境の石垣SW901の東にまで拡がっていた。大坂冬ノ陣の焼土を攪拌して整地した地層である。金箔押瓦や肥前陶器・瀬戸美濃焼志野・朝鮮王朝白磁などが出土した。石垣の東側では本層が花崗岩の切石群SX701を覆う。

第4層：石垣SW901に重なって見つかった溝SD501の中に堆積していた焼土混りのシルト質細粒～中粒砂層で、3層よりも焼土が攪拌されていない。大坂冬ノ陣の直後に埋没したものであろう。

第5層：石垣SW901よりも東に拡がる黄色細粒～中粒砂層で、石垣の東側の大川西岸の低地を

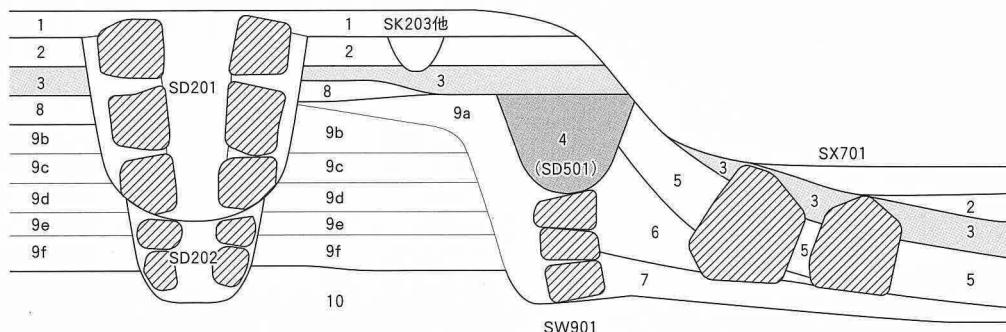


図4 調査地の地層模式図

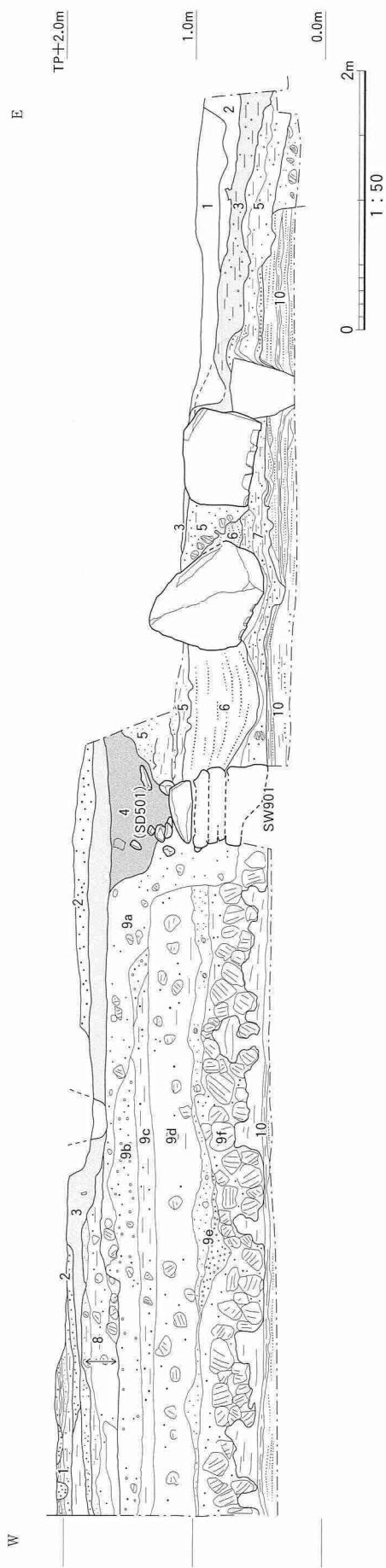


図5 東西地層断面実測図

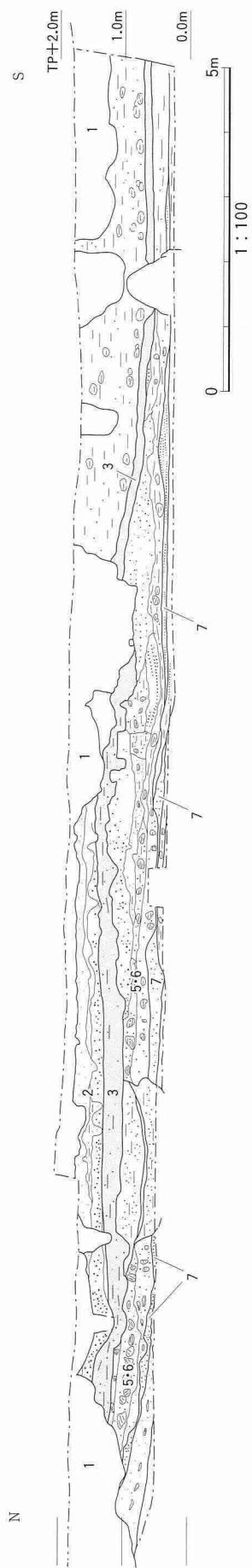


図6 南北地層断面実測図

埋める整地層である。本層は大きな花崗岩の切石群SX701と石垣SW901の大部分を埋めていた。SW901上段の石の抜取り溝SD501は本層の上から掘込まれていた。SD501は大坂冬ノ陣の焼土で埋まっていた。

第6層：石垣SW901の東側に接するように自然堆積した細粒～粗粒砂層であり、大川の水流によつ

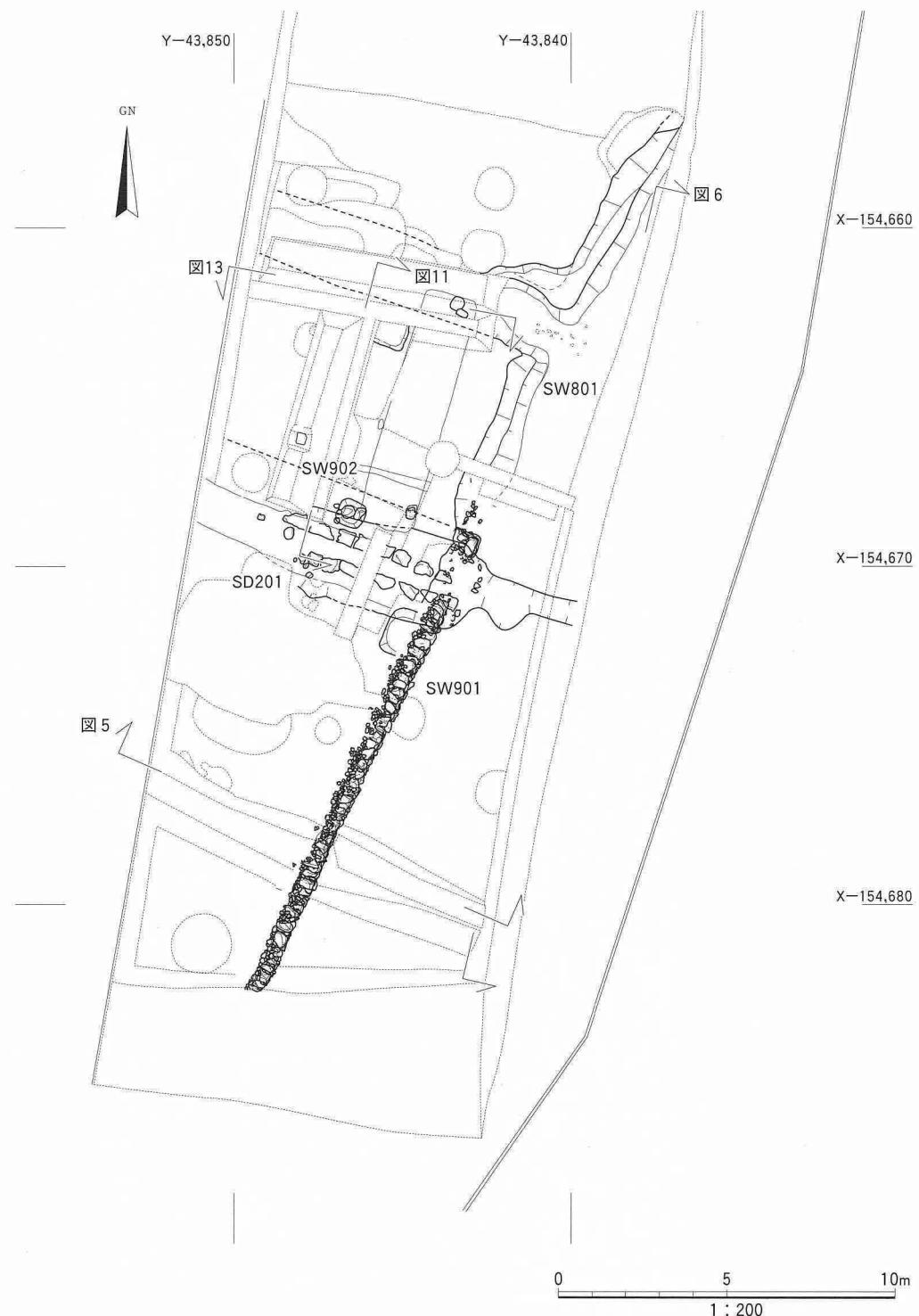


図7 主要遺構と断面図記録位置図

て第7層を溝状に削込んでいた。

第7層：石垣SW901の東側に拡がる暗灰褐色細粒～中粒砂・灰褐色シルト層などの互層である。図5の位置では不鮮明だが、調査地北側では著しい偽礫の集合となっている。ラミナの方向はかなり揃っている（写真1）。人為的な整地ではなく、地震のような巨大な自然の営力による変形である。第8層との直接的な堆積関係を示す部分はなく、新旧関係は明らかでない。第8層より古い可能性もある。切石群SX701は本層の上に乗っている。

第8層：土手SW902の北側に拡がる整地層で、最大層厚約1mである。粘土～シルトの偽礫を積上げていた。SW902以南の壇状の屋敷地を北へ拡張した整地層であり、石垣SW901の北延長上では整地の東辺を画する土手SW801を築いていた。この整地層の最上層はSW901・902を構築した第9層の上にも堆積していた。本層から肥前陶器が出土するので、豊臣後期に位置づけられる。

第9層：当地で最初に壇状の屋敷地を築いた際の整地層で、最大層厚約1.2mである。6層に細分できた。上位から第9a～9f層と呼称する。屋敷地の東辺を画する石垣SW901は第9b層を切込む掘形に構築されていた。この整地層で最下層の第9f層は人頭大の粘土偽礫を大量に投入して地盤をかさ上げし、その上位層である第9e～9c層は砂・やや細かな粘土偽礫などを投入して地盤のかさ上げをしていた。この上部には粗粒砂の第9b層を敷き拡げ、整地面を整形していた。遺物は少ないが、17世紀に降るものではなく、豊臣前期に位置づけられる。

第10層：大川が運んできた水成層で、この地域の地盤となる粘土～シルト～細粒砂層である。粘土を主体とする上部層は著しく変形されていた。地震のせいいか、または第9f層の盛土のせいいか、不明である。



写真1 第7層の堆積状況(ナイフの柄の長さは約10cm)

第2節 豊臣期の遺構と遺物

1) 第9層以前の遺構と遺物(図5・8~11・15、図版1~6・9)

SW901 花崗岩の自然石を積上げた石垣で、第9層で整地した壇状の屋敷地の東辺を画する。東側の大川に面を向け、南北15mにわたって検出した(図9・10)。石垣は長軸0.2~0.7m程の自然石を積上げ、その背後には拳大ほどの礫を裏込めとしていた。石垣は2~4段残っており、最下段の石は大川の水流から保護するために石垣構築時かその後の整地層(第7層)で埋められていた。石垣の北端部は西に折れており、方形の石を積上げ、角を作っていた。この北端部のすぐ南にある幅約1.4mの石垣の空白部分は、後世の攪乱によって壊されていた。北端の角より西側では黄色の細粒砂の偽礫を石垣と同様に積上げ、土手SW902が築かれていた。

SW902 石垣SW901の北端から西へ直角方向に築かれた土手で、第9層で整地した壇状の屋敷地の北辺を画する。この土手は、ほぼ垂直に4~5段ほどに細粒砂の偽礫が積上げられていた。積上げられていた偽礫は厚さ20cm、奥行き40cm、幅40cm程の大きな直方体を呈し、細粒砂のラミナは壊れていなかった。俵などの入れ物に入れられたものではなく、塊のまま積上げられたものと推定できる。その直下には、東端から約2m間隔で小礎石が2個並んで検出された。基部を土手の中に埋め殺しにして柱を建てていたとみられる。よってこの屋敷地の北辺には埠が設けられていたのかもしれない。

出土遺物は、以下のとおりである。1は縄文土器で、徳川期の遺構SK201から出土したが、ここで報告する。2条の沈線文帯が上下に配されており、幅が狭い沈線はヘラによって1条ずつ施文されたものである。滋賀里I式の深鉢であろう。下半は残りが悪く、調整がヘラケズリか巻貝条痕か不明である(図8)。第10層では備前焼の掛花生2が出土した(図15)。体部にヘラで施した斜め方向の刻線を6本巡らせ、肩部に小孔を穿っている。口縁部は直立するが、欠損している。第9層から出土したのは平瓦21で、幅広部の残存幅20.5cm、残存長は19.0cm、厚さ1.2cmを測る。凹面は向かって左端を縦にナデ調整し、その内側は横にナデ調整している。

2) 第7・8層の遺構と遺物(図11~13・15、図版3~6)

SW801 石垣SW901が西に折れ曲がる地点より北に、石垣と同じ方向に延びる土手で、第8層によって北側に拡張された壇状の屋敷地の東辺を画する。この土手はシルト~細粒砂によって形成されていた。SW902のように細粒砂の偽礫を積上げたものではなく、西から第8層で整地したもので、東端部は緩やかな斜面となっていた。土手SW801の西で積上げられた盛土の最上位層は土手SW902の南側にも及んで第9層を覆っていた。これによって土手SW902以南の屋敷地が北側に拡張されたことがわかる。SW801はSW901の北端から2.5m~4.2mの間が西側にへこんでいた。屋敷地へ上の出入口だったのかかもしれない。

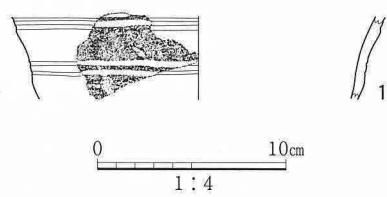


図8 縄文土器実測図

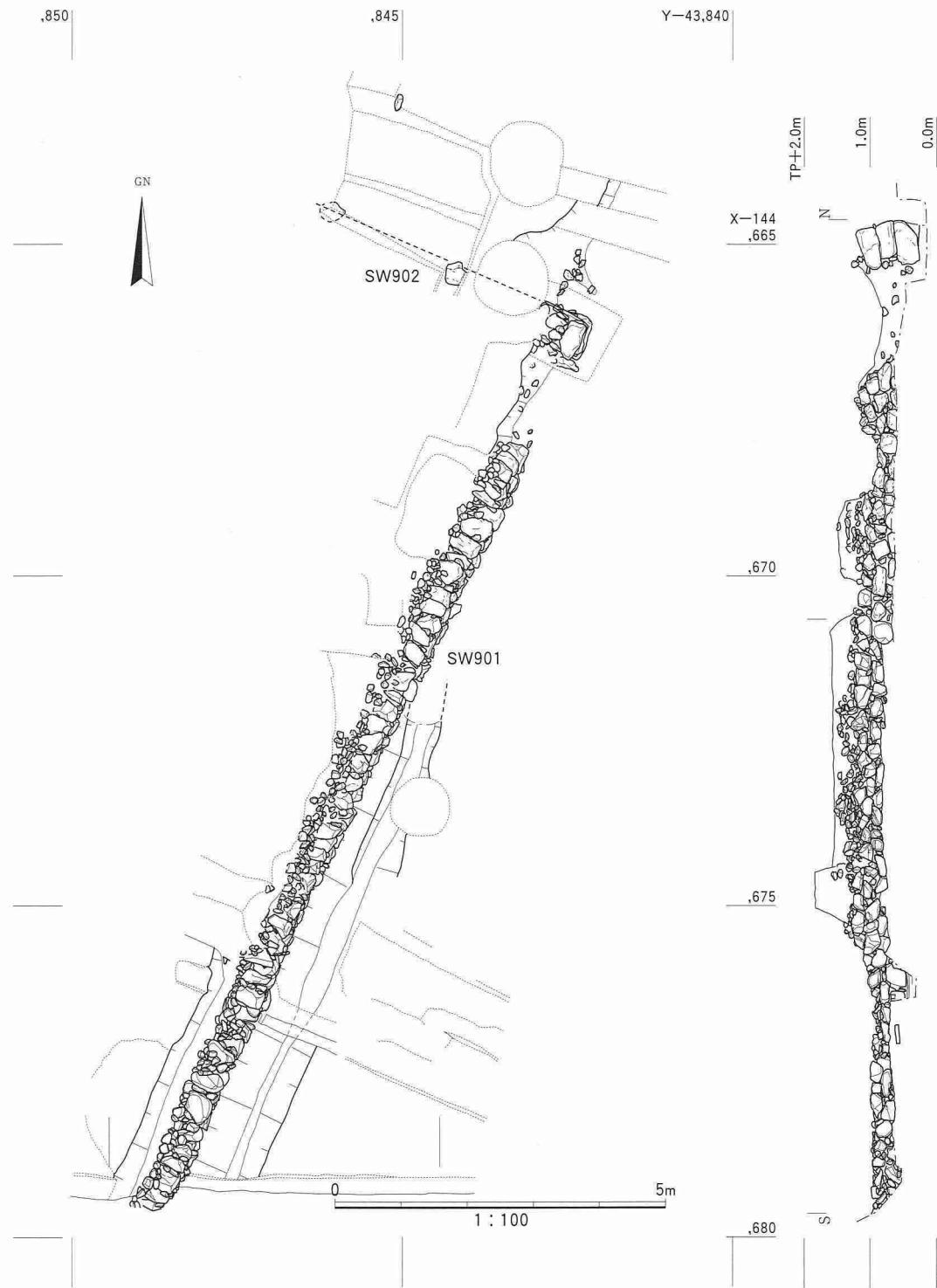


図9 第9層の遺構実測図

この拡張時の盛土(第8層)から、3~6・8・20が出土した。3・4は土師器である。3は焼塩壺で、ややくびれた頸部から外反する口縁部が立上がる。大坂の焼塩壺の分類[積山洋1999]では豊臣後期に通有のB1類である。4は皿で、底部には凹凸があり、ススが付着した口縁端部は薄く尖る。5は肥前陶器の徳利で、体部外面にオリーブ黒色の鉄釉を施している。内面は青海波が顯著である。6は胎土目のある肥前陶器皿である。8は備前焼擂鉢で、内面と見込みには8本1単位の櫛による擂目が見

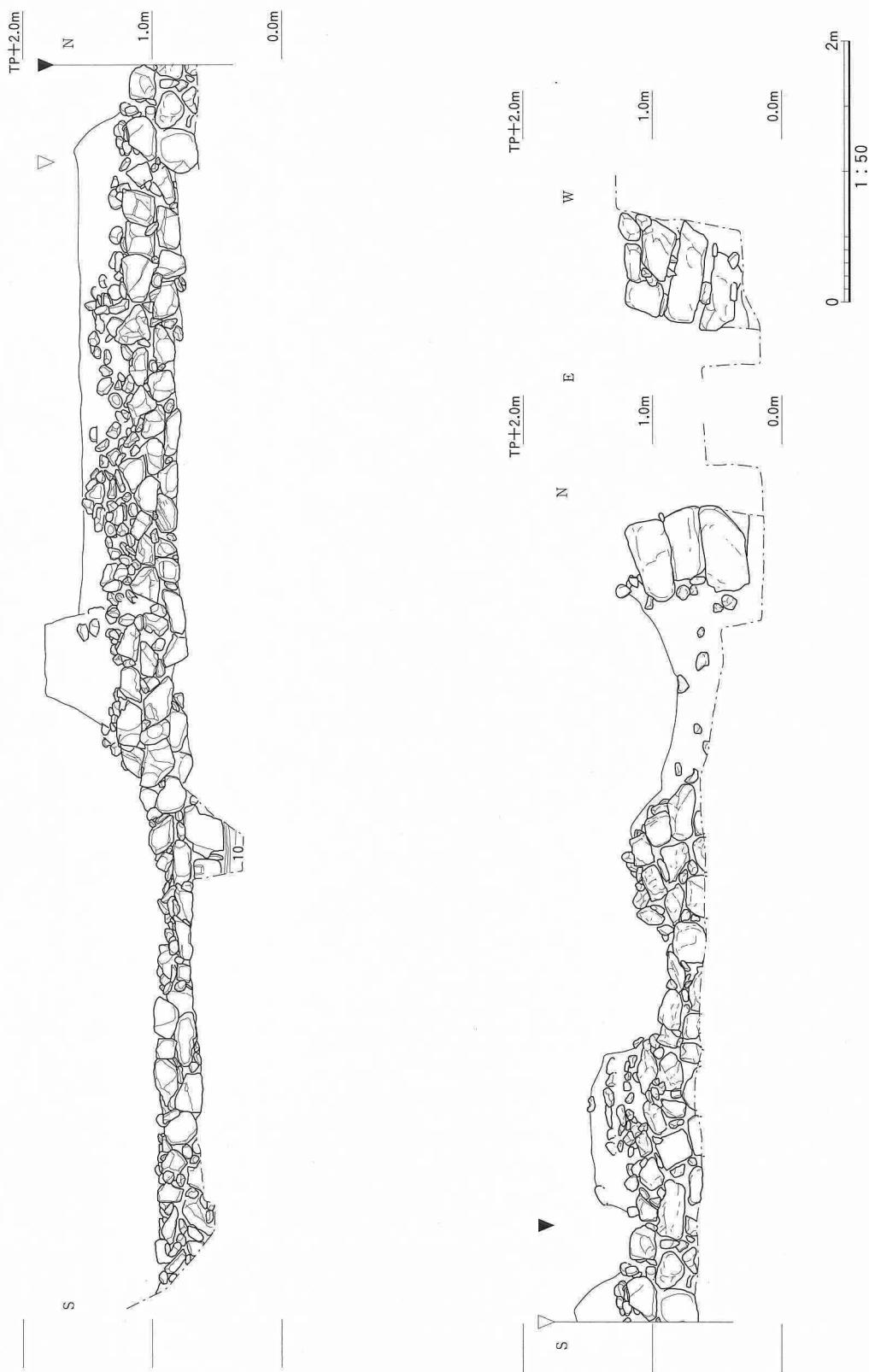


図10 石垣SW901立面実測図

られる。口縁部はかなり厚い。20の巴文軒丸瓦は左巻きで珠文は18個ほどに復元される。焼成はややあまく、丸瓦部の凹面には鉄線で粘土板を切り出したコビキB手法が見られる。以上から、肥前陶器と焼塩壺B1類を含む第8層は豊臣後期の整地層であるとみなされる。

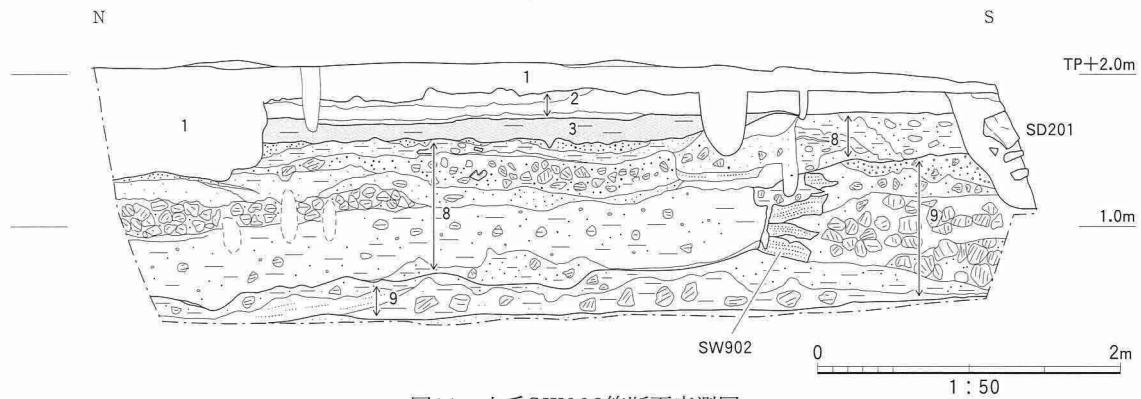


図11 土手SW902等断面実測図

SK801 石垣SW901の西約2mの位置で検出された直径約1.2mの土壙である。鉛製の鉄砲の弾7が出土した。直径12mmで重さは10.6gである。径2mm・深さ3mm弱の小孔があるが、後次的なものであろう。

SX701 石垣SW901の東側に散在していた花崗岩の切石群である。石は第7層上に点在し、最終的には第3層によって覆われており、大坂冬ノ陣までに埋没していたと考えられる。ただ、これらの石はSW901に使用されているような小振りの自然石ではなく、大きな矢穴がある切石であり、SW901に使用されていたものが破壊され、前面に転がったものではないと推測できる。SW901構築後に、別の目的でこの位置に放置されたものである可能性が高い。放置された時期やその性格については不明であるが、新たな石垣の構築が計画されていたのかもしれない。

88は石垣の東側の第7層から出土した銭貨である(図版9)。9枚が鋸着してひと塊になっており、中央の孔に通した紐が残っている。もとは98枚などの単位で一くくりにしたさし銭であったかとみられる。このうち2枚が分離していたので、X線で調べたところ、天聖元(1023)年初鑄の北宋銭「天聖元宝」と判明した。ただし、いずれも1mm以下と薄いので、模鋳銭の可能性が高い。

3) 第5層の遺構と遺物(図14・15、図版3~6)

SD501 石垣SW901の直上で見つかった幅0.5~1.7m、深さ0.5m弱の溝である。平面形はやや蛇行しており、乱れた形状である。第5層を掘込んでいた。この時点ではすでにSW901の大部分は埋まっていた。おそらくこの溝はSW901の上段の石の抜取り溝であろうと思われる。埋土は焼土に由来する第4層であり、大坂冬ノ陣で天溝が自焼した際か、その後間もなく埋められている。

出土遺物は13~17である。13・14は土師器の皿で、口縁部は直線的に伸びる。15は肥前陶器の皿である。三日月高台の内側は露胎で、部分的に釉がかかっているが、意図的な施釉ではない。目積跡はない。16は粗製の青花碗で、内面は口縁部の途中までしか施釉されておらず、露胎である体部下半の圈線は、酸化により呉須が黒く発色している。外面の染付は太く、あるいは細く描かれている。17は丹波焼の大平鉢で、復元口径は約34cmである。これらは豊臣後期のものと変わらない。

また、第5層からは9・10・12の肥前陶器、11の華南三彩、18・19の瓦が出土している。9は白色で薄手の皿であるが、あるいは朝鮮王朝陶磁であるかもしれない。10は天目碗で、褐色の鉄釉が施さ

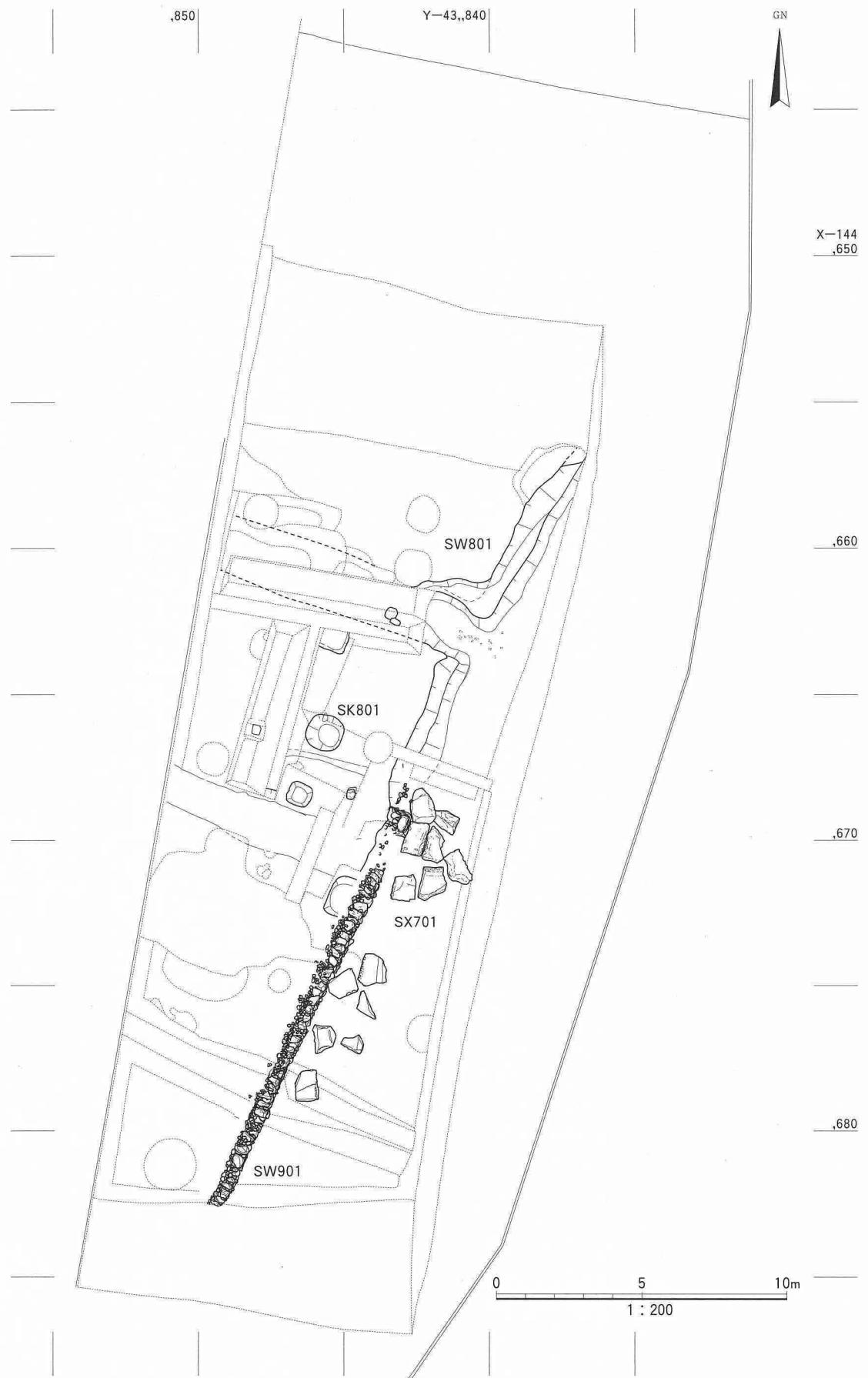


図12 第7・8層の遺構実測図

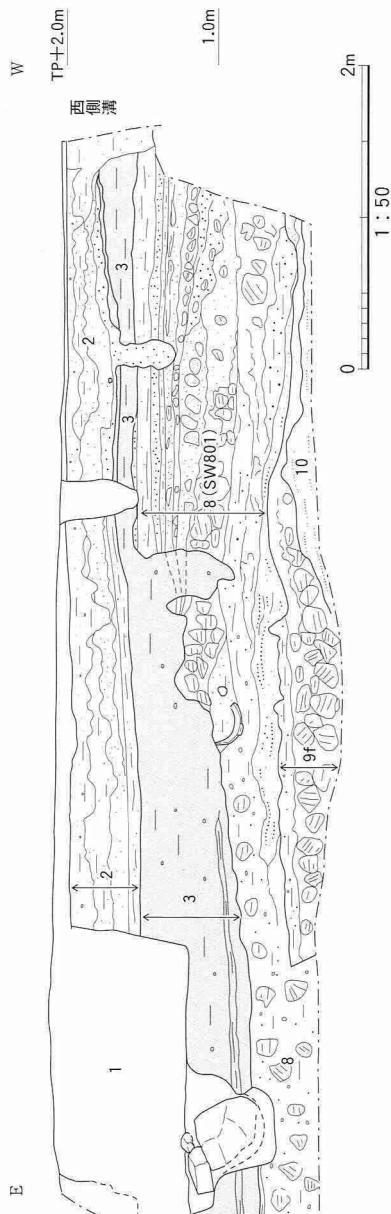


図13 SW801断面実測図

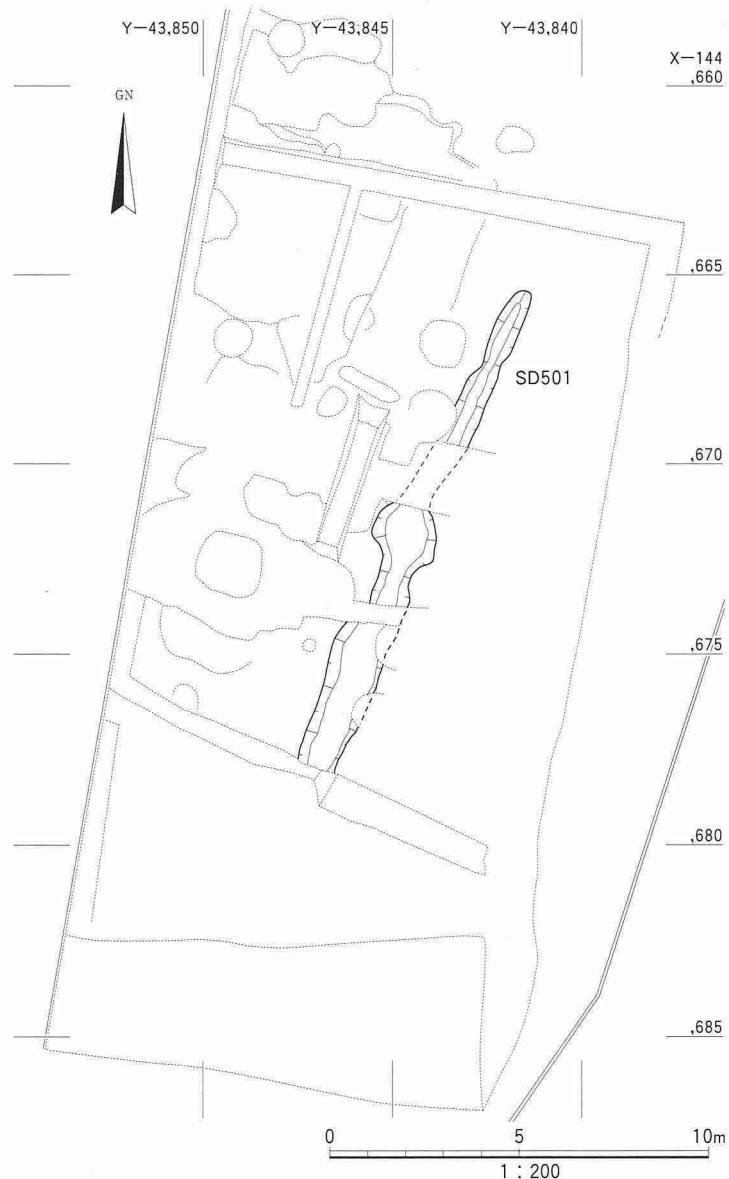


図14 第5層の遺構実測図

れている。12の丸碗は焼成がやや不良である。11は華南三彩の盤の口縁部で、輪花に作る口縁部の端部上面に刻線と黄色釉を施し、それ以外には緑釉を掛けている。口縁部の下面是緑釉のみで、内側には口クロ回転による刻線が見られる。18は道具瓦の金箔押瓦で、向かって下端の面(アミカケ)に赤漆を塗布し、そのごく一部に金箔が残る。19は丸瓦で、焼成はあまいが、2次的に火を受けたせいかもしれない。19にもコビキBが認められる。

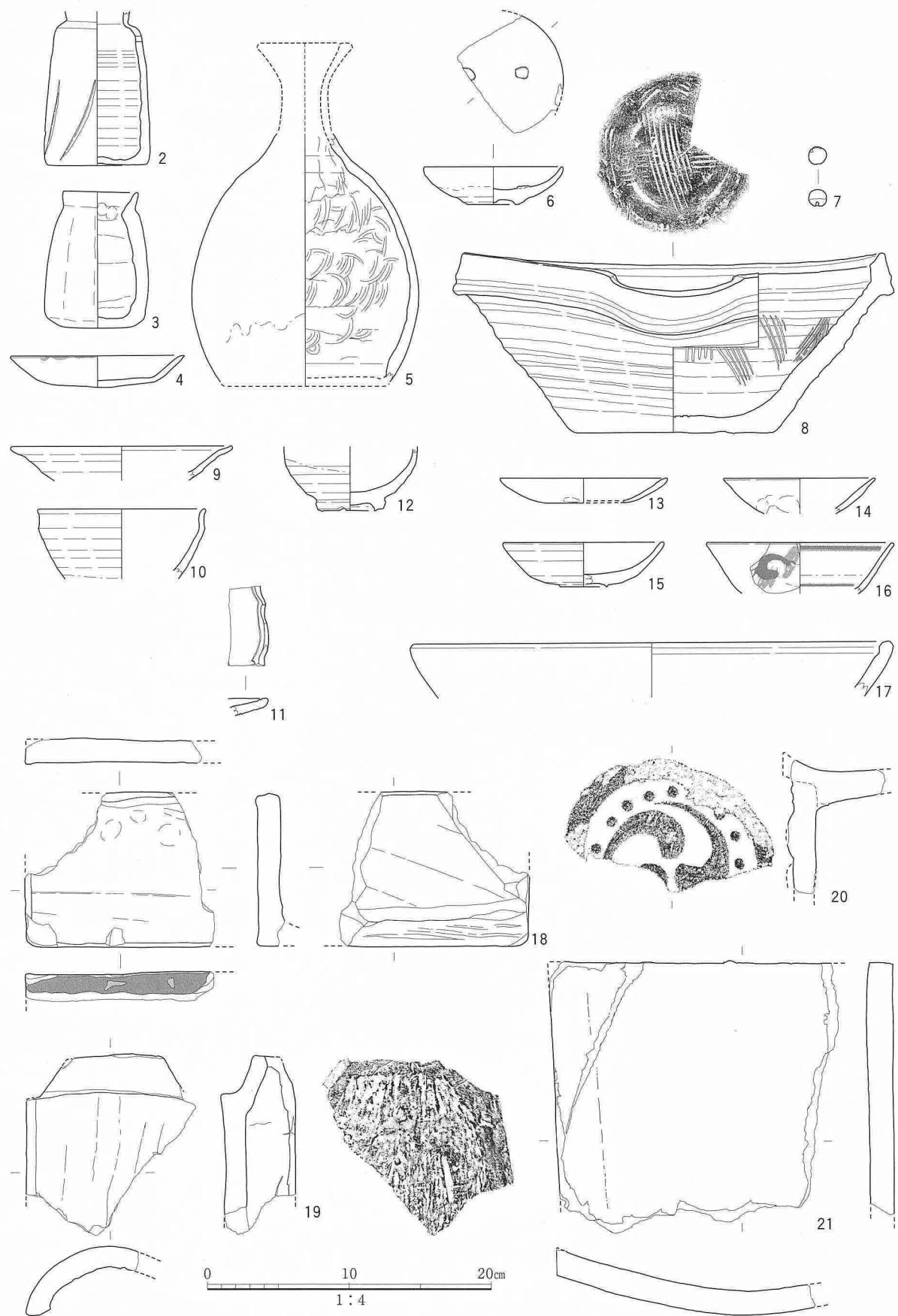


図15 豊臣期の遺物実測図

第10層(2)、第9層(21)、第8層(3~6・8・20)、第5層(9~12・18・19)、SK801(7)、SD501(13~17)

第3節 徳川期の遺構と遺物

1) 第3層の遺構と遺物(図16・17、図版7・10~12)

SK301 調査区の南側で検出した土壙である。形状は不整形で、東西約1m・南北約0.5mを測る。この遺構から丸瓦42が出土している。これは割れた玉縁との接合面に隙間が生じており、いったん割れたのち、それが2次的に火を受けて歪んだためかと思われる。コビキBによる粘土板切出し痕跡が見られる。

小溝群 もと石垣SW901があった位置より東は大川に向って1段低くなったままであったが、その部分のTP+1.3mの高さで検出した第3層上面の溝群である。溝幅は約20cmで、深さは5cmも残つていなかった。いずれも東西の方向で平行して検出された。畠の畝間溝とみられるが、上面が削られているので、畝の本来の高さは不明である。

第3層出土遺物

22~24は土師器皿で、22・23は口縁部が長く直線的に伸びるのに対し、24の口縁部は短い。25・30・31・34は肥前陶器で、25は碗、30・31は皿である。30は露胎の内外面に白泥で模様を描き、一部は高台内と畳付にも及んでいる。25・31は豊臣期かその後のものであるが、30はもっと新しい。34は大型鉢で、31とともに鉄絵を描いたものである。26・27は焼塩壺である。26はB1類、27は体部が分厚いので、C1類かと思われるが、口縁部を欠く。28・29は備前焼で、28は徳利の口縁部、29は厚手の平底鉢である。体部外面の下半は粗雑なナデまたはケズリで、口縁部は備前焼擂鉢に似る。32・33は肥前磁器で、32は見込みを二重圈線で囲い、高台径が大きい17世紀後半のタイプである。33も同時期の青磁碗である。35は朝鮮王朝の白磁皿で、全面に施釉し、見込みと高台畠付に各6個の砂目が残る。36は華南三彩盤の底部で、内面にはヘラによる刻線と黄色釉・緑釉を施し、外底面は露胎である。2つの破片が同一個体かどうか不明ながら、図のように復元してみた。37・38は石製品である。37・38は接合し、もとはひとつの砥石であったのが割れたものである。図の上端と下端、左端と右端に残る加工痕跡から、長さ13.4cm・最大幅3.6cmの小型品であると復元でき、刀子など刃渡りの短い刃物を研ぐのに適したものである。38は37よりごくわずかに薄いので、38は割れたのちも砥石として利用されたのかもしれない。39の土錘は中央が膨らんだ形態で、重さは37.7gである。孔径が1.65cmと大きく、比較的太い綱を用いた綱が想定される。40は軒丸瓦の金箔押瓦で、外縁部のみの破片である。下地の赤漆の上に粉状の金箔が点々と残っている。41は唐草文軒平瓦で、子葉は中心飾りから右上方へ伸び、唐草は下向きと上向きに反転する。焼成は不良で、炭素の吸着はほとんど見られない。

第3層の遺物の多くは豊臣後期に属するものであり、もとは大坂冬ノ陣の焼土であろうと推測された所以であるが、土師器皿24、肥前磁器32・33は徳川期のものである。おそらく肥前陶器30もそうであろう。肥前磁器は大橋編年[大橋康二1989]のⅢ期であり、大坂の陶磁器編年[積山洋1999]では第5または第6段階に当る。17世紀後半に属する。



図16 第3層の遺構実測図

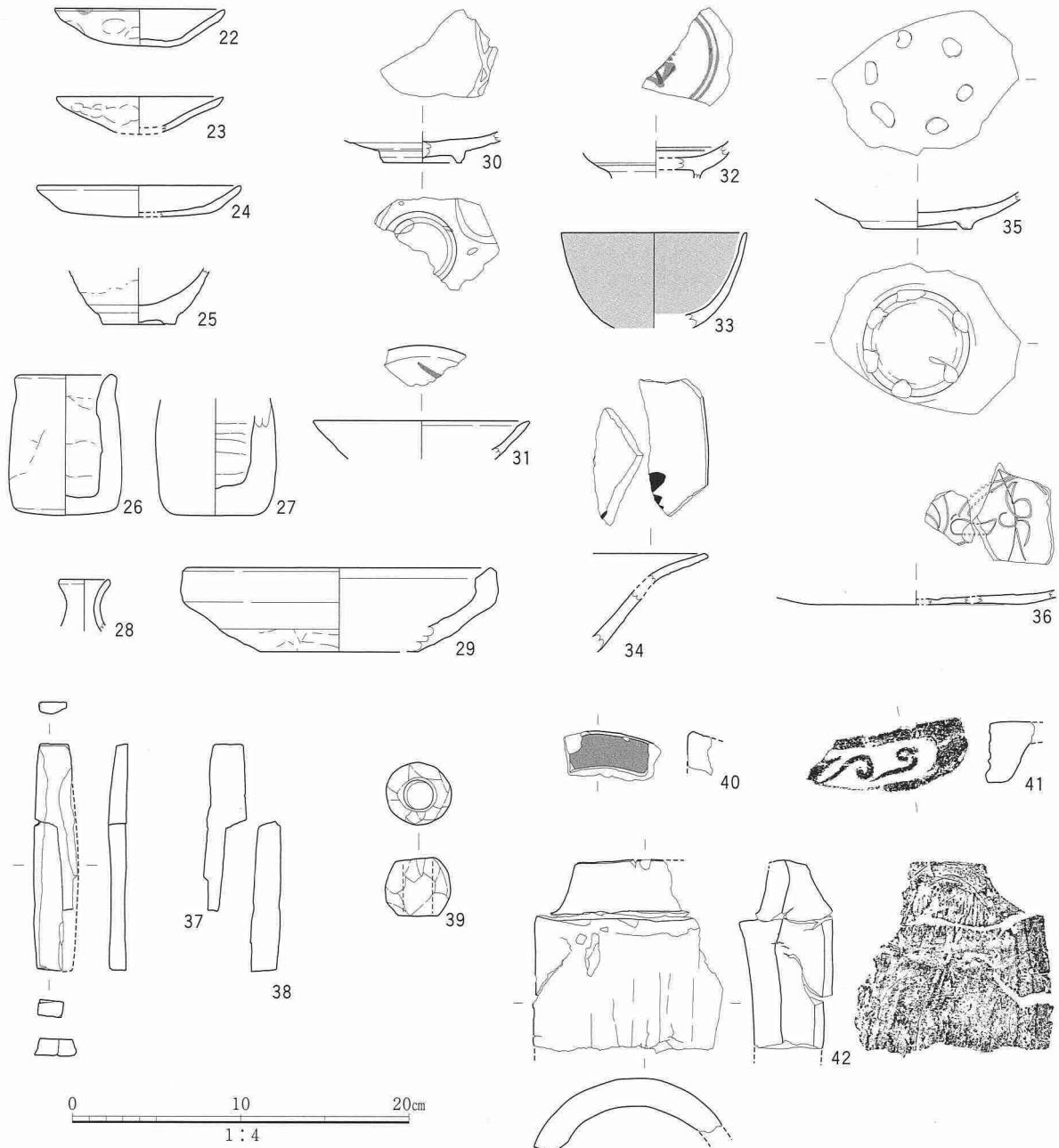


図17 第3層出土遺物実測図

第3層(22~41)、SK301(42)

2) 第1・2層の遺構と遺物(図18~24、図版8・12~14)

SD201 調査区中央で検出した東西方向の石組溝である(図19)。幅約0.4m、深さ約0.3mで、両側には花崗岩の切石を2段積上げており、底には自然石が敷かれていた。東西両端は後世の攪乱によつて失われていた。この溝の埋土はレンガを含む第1層であり、近代に廃絶している。一方、掘形の遺物は43~56である。43は肥前陶器碗の口縁部である。44~54は肥前磁器である。白磁碗44~46は薄手のつくりで、46は高台径が大きく、畠付の処理も丁寧である。染付碗47は高台径が小さくなつており、46より新しい。48~50・52は同形・同大で同一モチーフを描いた染付皿で、少なくとも4客が

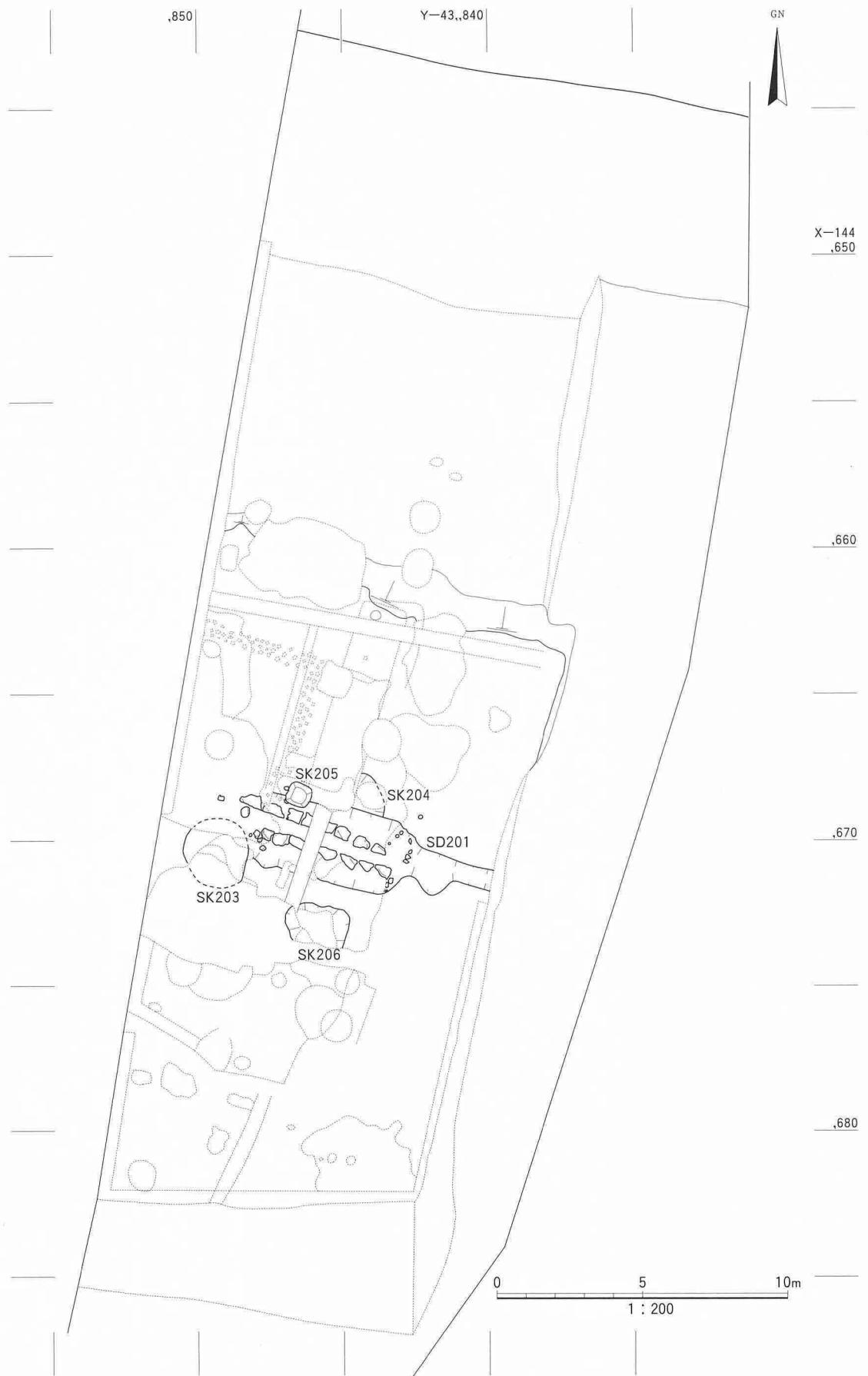


図18 第2層の遺構実測図

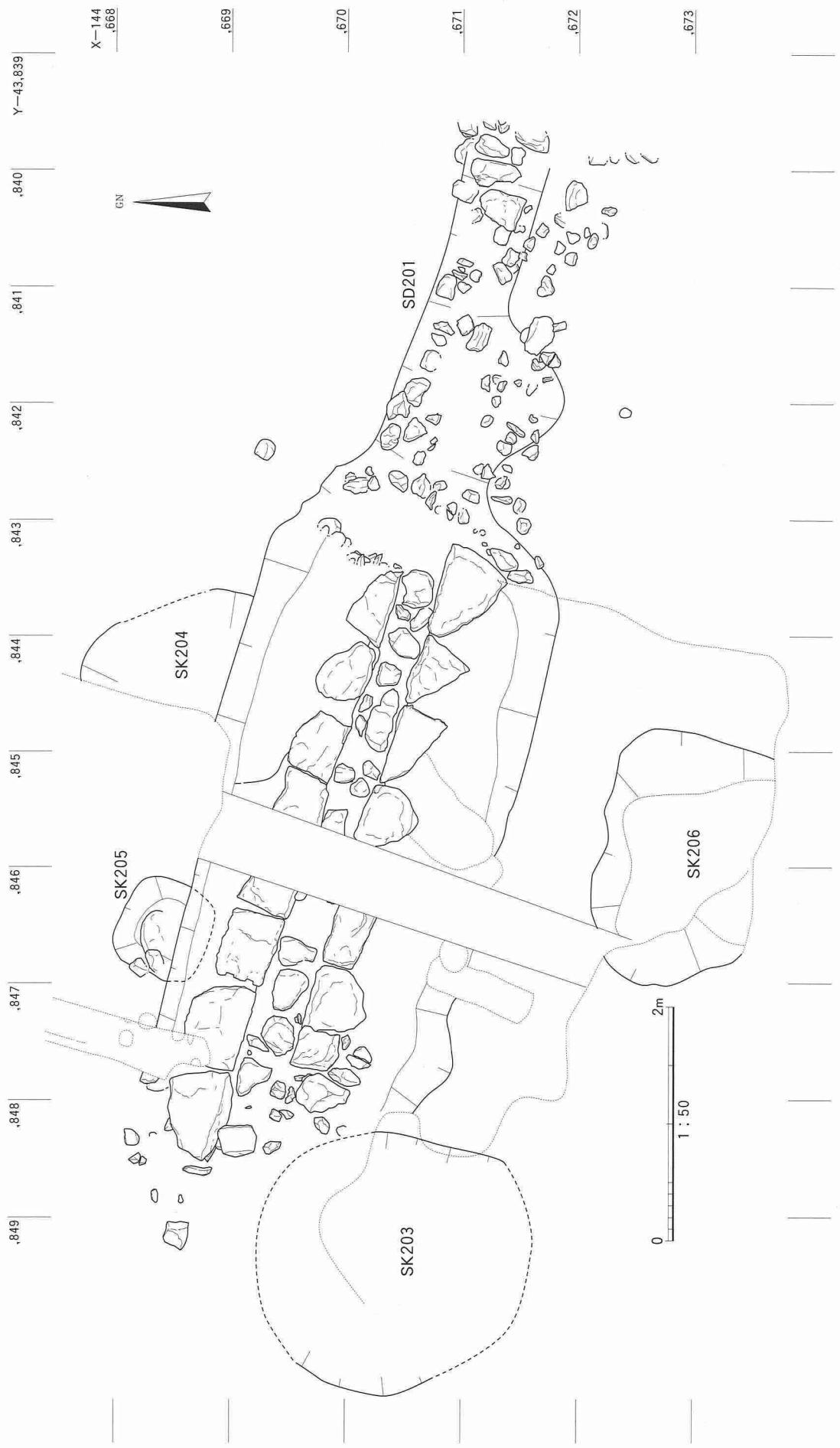


图19 SD201实测图

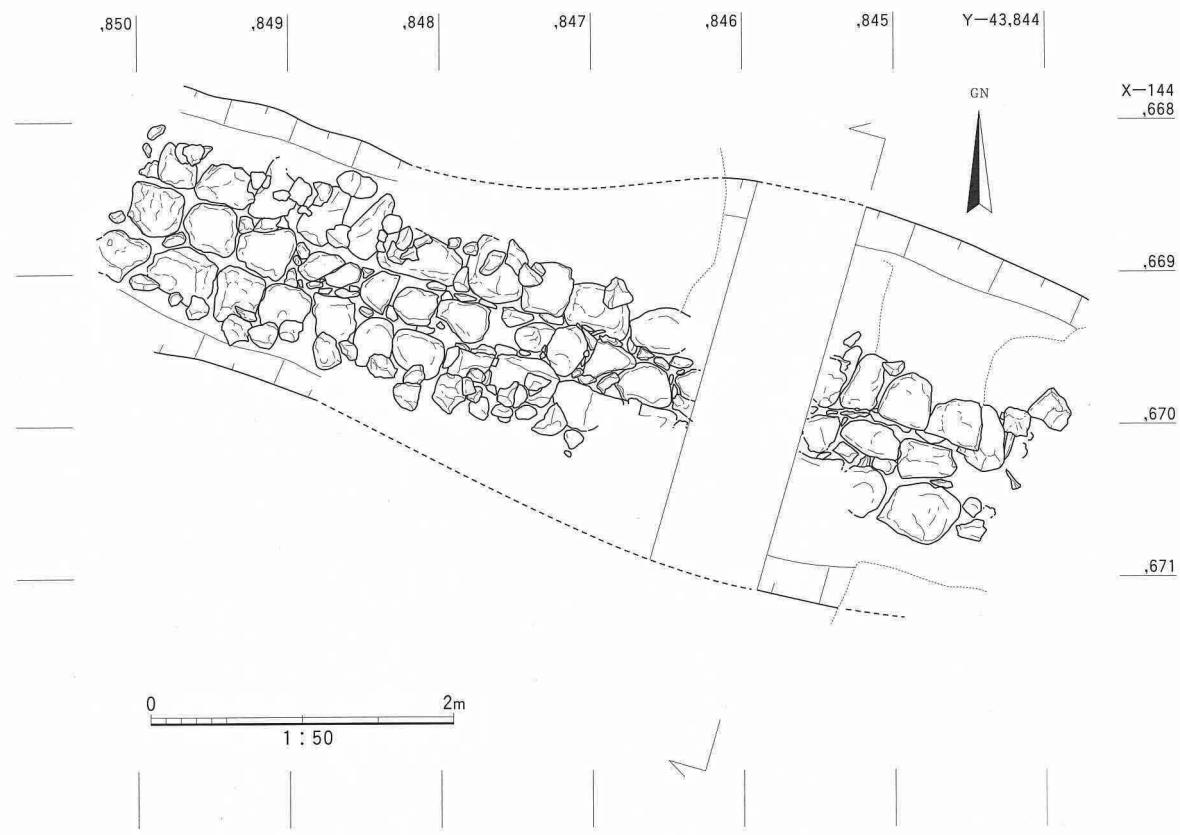


図20 SD202実測図

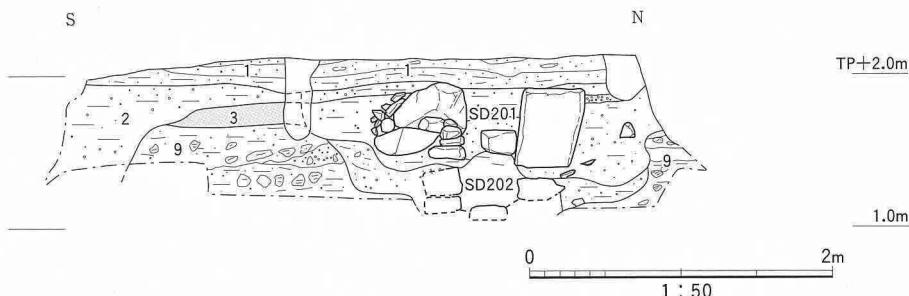


図21 SD201 · 202断面実測図

確認できる。もとは5客で1セットであったと思われる。見込みの五弁花は初期の複雑な手描きであり、高台内外には圈線を多く巡らせている。52の口縁部は輪花に作っている。51は白磁皿としたが、天地逆かもしれない。53は大型の染付皿の口縁部で、輪花である。54は香炉で、半磁胎であるが、焼成不良の磁器であろう。外面と口縁部に青磁釉、内面には透明釉を掛け分け、一部は露胎である。55は板状の道具瓦で、焼成前に穿たれた釘孔があり、鉄錆が付着している。図の上端と右端から2.5cm内外の位置にごく細い刻線が引かれている。厚さは1.6cmである。建物の壁の下部外周に貼った埠であろうか。56は古代の土師器羽釜で、胎土は生駒西麓のものである。

以上の陶磁器は、染付碗47が大坂の江戸時代第9段階、皿は第7～8段階のころを下限とするが、下層のSD202(後述)がもっと新しく埋まっているので、これらの陶磁器がSD201を造った年代を直接示すわけではない。

SD202 SD201の下位で検出した石組溝で、ひと抱えほどの自然石を側石とし、底にもほぼ同じ大

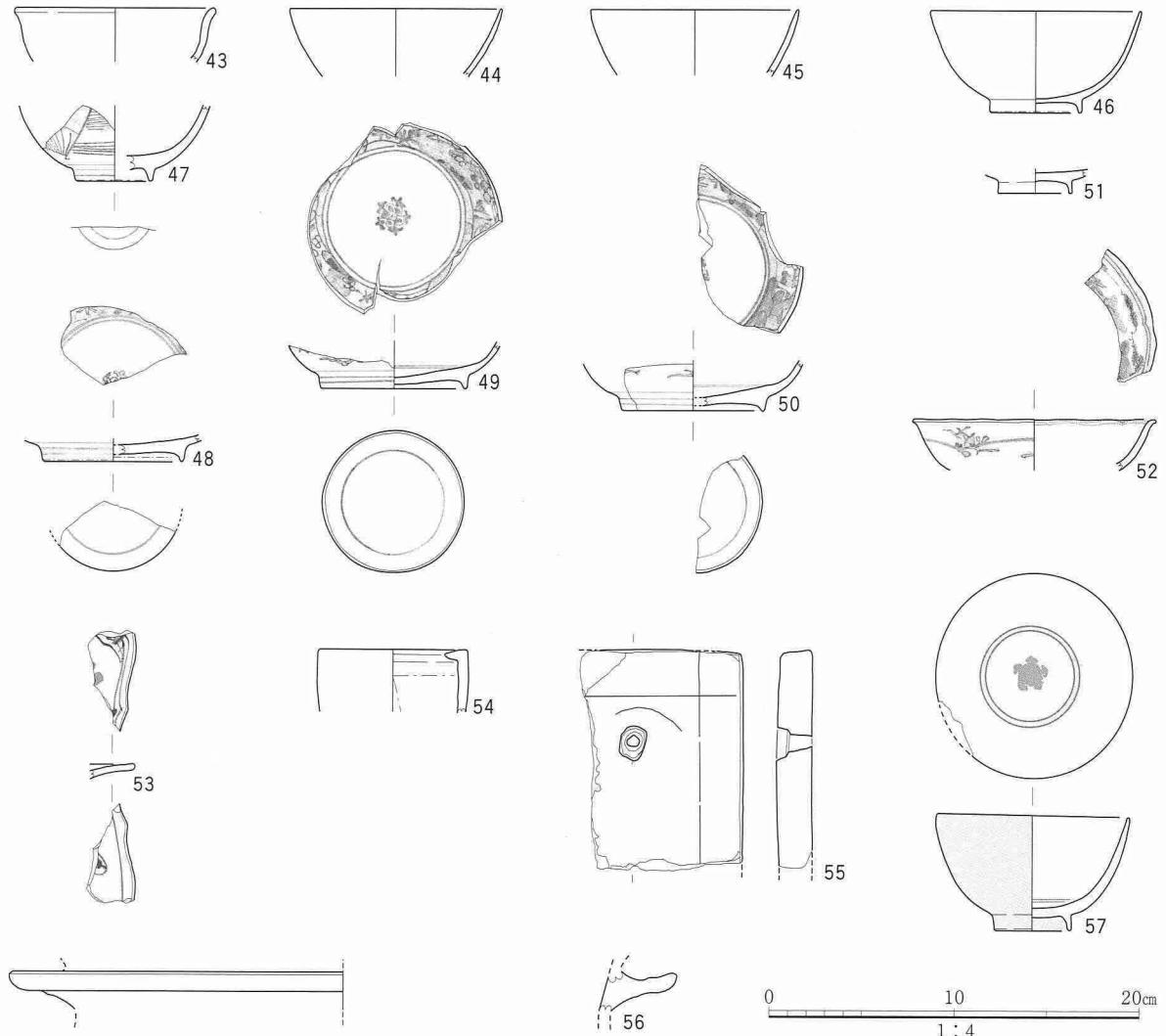


図22 SD201・202出土遺物実測図

SD201(43~56)、SD202(57)

きさの石を敷き詰めている(図20)。溝の幅は約0.3m、深さは最大0.3m遺存していた。SD201と同じ位置に検出されたことから、SD201がSD202を踏襲しているものと推定できる。この位置が徳川期を通じて敷地境であった可能性が高い。この溝の埋め土から肥前磁器の青磁染付碗57が完形で出土した。見込みの五弁花はやや崩れており、コンニヤク印判である。江戸時代第11段階の18世紀後半のものである。

SK203 攪乱によりごく一部しか残っていなかった。東西約2.2mを測る。この土壙から肥前陶器58~60、京信楽系陶器61・62、丹波焼63、軒瓦64・65などが出土した。肥前陶器は豊臣期を中心に盛行した碗や皿であり、60の目積跡は胎土目である。61は内面に透明釉を掛けた鍋、62は外面に白泥で模様を描いた小型の土瓶で、口縁端部とその内面を露胎としている。63は鉄釉を搔き取って文字を書いた徳利である。64は軒平瓦で、瓦当面に雲母粒が目立つので、離型材であろう。65は黒光りする左巻きの巴文軒丸瓦である。外縁にスタンプがあり、右側の旁が「界」なので、堺産の瓦であろう。

SK203には17世紀の古い遺物もあるが、それ以外のほとんどが江戸時代第13段階以後の19世紀に降るものである。



図23 SK203~206出土遺物実測図

SK203(58~65)、SK204(66)、SK205(67~70)、SK206(71~74)

SK204 掛乱とSD201に切られて、東西1.1mしか残っていなかった土壙である。やや大ぶりの丸瓦66が出土している。

SK205 掛乱とSD201の下で検出した。東西・南北とも約0.8mの土壙である。肥前磁器の白磁67~70は蓋67・68があるので、蓋付碗であり、70の高台径はさほど大きくない。したがって、これらは18世紀のものである。

SK206 東西約2.2mの土壙で、南側は掛乱されていた。備前焼71、軒丸瓦72や石製品73・74などが出土している。71は深い鉢形を呈し、口縁部外面がくびれて立上がり、端部を外側へ拡張している。72の巴文は左巻きで瓦当面には離れ砂が顕著に認められる。73は図の左側面が平滑な面に加工されているが、どのような製品か不明である。砂岩製である。74も砂岩製の亜円礫で、図の左下に打撃痕が

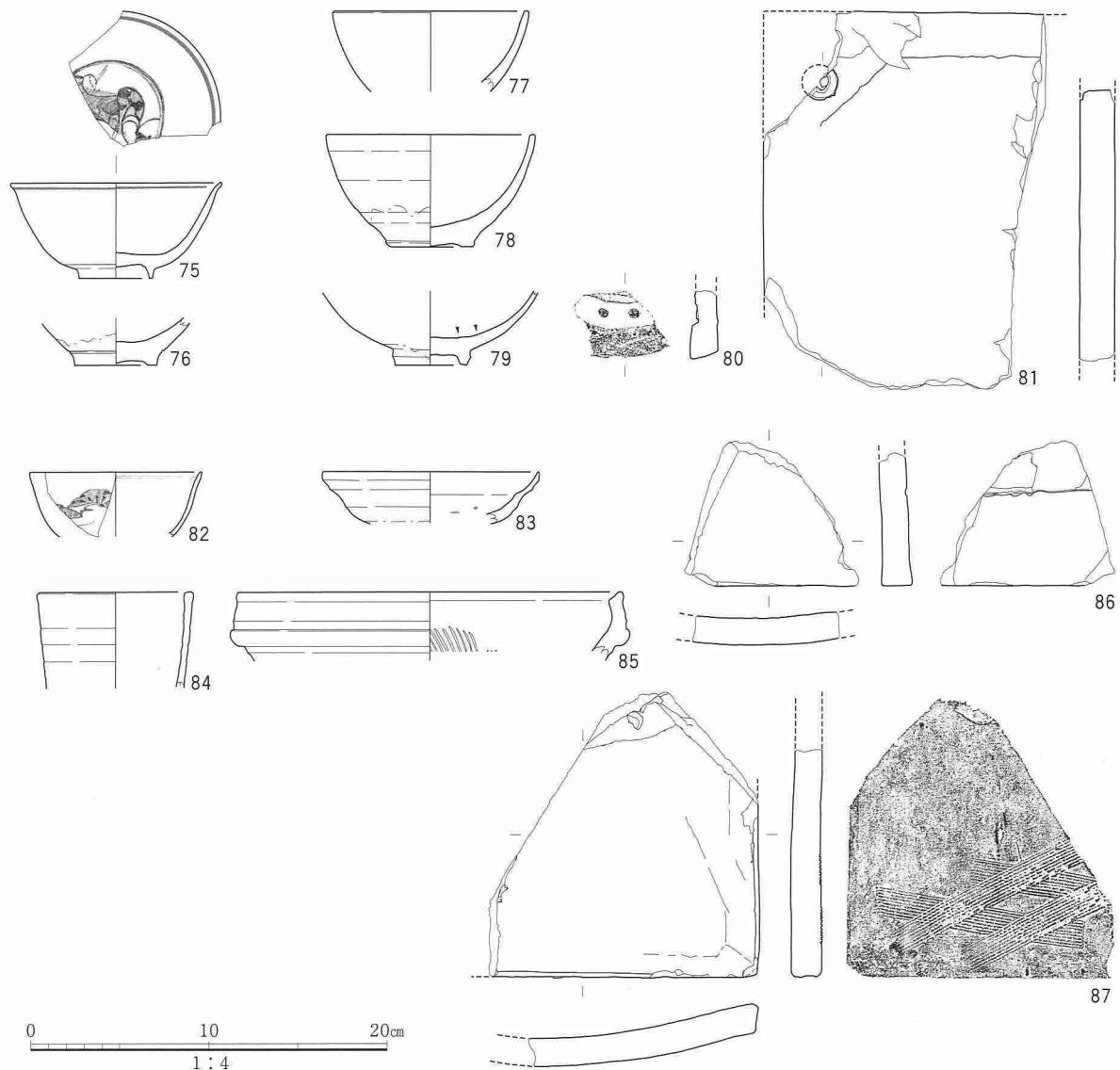


図24 第1・2層出土遺物実測図

第2層(75~81)、第1層(82~87)

認められるが、年代は不明である。

第2層出土遺物

75は粗製の青花碗で、口縁部は軽く外反し、高台内は露胎である。76~79は肥前陶器で、79の皿は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台の内外を露胎としているが、他は豊臣後期から徳川初期の碗である。80は軒丸瓦で厚み1.1cmと薄い。81は先述の54と同様の道具瓦で、釘孔は焼成前に穿たれている。厚さは1.8cmである。

第2層の年代を陶磁器からみると、最新のものは79であるが、これは高台のつくりなどがやや粗雑で、蛇ノ目釉剥ぎ碗の初期のものではない。江戸時代第8段階から第11段階までの間に位置づけられ、おおむね18世紀代に当る。なお、瓦類に関しては詳細不明である。

第1層出土遺物

ここでは近代以後で一括した第1層から出土した遺物のうち、近世に遡るものいくつか報告する。

82は小ぶりの肥前磁器端反碗で、江戸時代第13～14段階の19世紀のものである。83は肥前内野山系陶器の皿で、透明釉を基調とし、点々と緑釉を散らしている。第8～11段階の18世紀に属する。84は口縁が直立する備前焼の筒形鉢で、85は同擂鉢である。口縁部は豊臣後期～徳川初期のものより薄手なので、より古いものかもしれない。86は平瓦であるが、凸面の下から約5cmのところに明瞭な段があり、その上方はケズリと、類例に乏しい。何らかの道具瓦であろうか。87はいわゆる井戸瓦と思われ、厚みは約1.6cmである。凸面に櫛状の工具で直線的に浅くキザミメを施している。つくりは丁寧である。

第4節 天満地域の遺跡と本願寺跡の遺構変遷

1) 天満地域における本願寺前史

大坂城と船場地域の大坂城下町跡の発掘調査が本格化したのは1980年代であるが、大川以北の天満地域では1990年代からであり、造幣局構内での調査(TN93-3次)が最初である[大阪市文化財協会1995]。その後、西方の天神橋遺跡や北方の同心町遺跡などでも調査が行われ、次第にこの地域の様相が判明しつつある。ここでは、まずこれらの調査成果を時代順にまとめておく(図2・3)。

弥生～古墳時代

この地域で発見されている最古の遺物に、今回報告する縄文土器(滋賀里I式)があるが、この土器は近世末の遺構から出土しており、縄文人のこの地での足跡を直接示すかどうかは不明である。

遺構で確認されるもっとも古い例は同心町遺跡(DC96-1次)で見つかった弥生時代中期の集落跡で、畿内第Ⅲ様式を中心とする時期の土壙などがまとまって発見された[黒田慶一1998]。その北方の調査(DC02-3次)では弥生時代中期に加えて後期から古墳時代初頭ごろの遺構が多く見つかり、この地の陸化が大川(旧淀川本流)と大和川の複合的堆積作用によると推測されている[趙哲済2003]。

次いで遺構・遺物がまとまって検出されるのは古墳時代である。天満本願寺跡(TN04-1次)では、砂地の上で古墳時代中期と後期の集落跡(竪穴建物・掘立柱建物等)が発見された[小田木富慈美2004・2005]。ごく最近、この集落は南側約50mの地点(TN07-2次)でも確認され、柱穴や土壙が多数見つかっている。天神橋筋遺跡(TJ00-2次)では後期の土器埋納遺構が検出され[佐藤隆2001・2002]、遅くとも古墳時代には大川北岸の陸化が上町台地の北端裾近くまで進んでいたようである。

古代～中世

飛鳥時代には、天満本願寺跡(TN07-2次)で、古墳時代以来の集落が連続していることが確認された。同心町遺跡(DC96-1次)でも飛鳥時代の可能性のある溝などが見つかっている。

奈良・平安時代には同心町遺跡(DC02-3次)で、畠の作土らしき地層の上で溝や土壙など見つかっている。同心町遺跡では古代の遺物も比較的多く出土している。天満本願寺跡(TN97-1次)では古代の可能性が高い正南北の溝が見つかっている[大阪市文化財協会1998b]。また東天満1丁目所在遺跡(HX99-1次)では、奈良時代後半～平安時代初期ごろの溝・柱穴などが見つかり、製塩土器も出土している[辻美紀2001]。同時期の遺物は天満1丁目所在遺跡(TW98-1)でも認められた[佐藤2000]。天神橋筋遺跡でも奈良時代～平安時代中期の遺物が少なからず出土している。

中世になると、同心町遺跡(DC02-3次)で水田跡らしき地層が発見され、その上下で溝などの遺構が見つかっている。天満本願寺跡でも、造幣局北部(TN07-3次)で11世紀ごろの同様の層が見つかっている。同遺跡南部(TN04-1次)では13世紀ごろとみられる高麗青磁が出土し[市川創2004]、その南側での調査(TN07-2次)では小穴群等が見つかっている。天神橋筋遺跡では平安時代後期～鎌倉時代の遺構のほか、室町時代の遺構・遺物が多く発見されている[佐藤2002]。

以上であるが、ここで注意されるのは以下の4点である。第一に、同心町遺跡では、南北200m以

上を隔てて弥生時代の遺構が確認されており、それも中期から終末期(庄内式)に及んでいることである。まだ点的な成果しかないが、案外大規模な集落であった可能性を秘めているようである。第二は、古墳時代の集落が天満の南部で発見されたことで、すでに指摘されている[小田木2004]ように、これは上町台地北端に建設された5世紀の大型倉庫群と連動したものとみることができる。5世紀の倉庫群が大きな契機となって、住吉方面も含む上町台地一帯の開発が大きく進展した[積山洋1994]のであるが、それが台地の北方低地でも確認されたわけである。第三に、奈良時代の天満には東大寺の西国経営の拠点として新羅江莊が置かれ、造幣局を含む天満の東側一帯がその地と推定されている[栄原永遠男1992]。今のところそれに関わる資料はあまりなく、むしろ西側の天神橋遺跡に遺構・遺物が多いことが注意される。第四に、中世には大川沿いは渡辺津として発展したが、その位置は最近の所説では現在の東横堀川付近とされる[松尾信裕2006]。北岸の天満側でその候補となる地は天神橋遺跡のあたりであろう。

2) 天満本願寺跡の遺構変遷

造幣局構内では、今回を含めて7度にわたる発掘調査が行われてきた。そのうち本願寺が所在した豊臣前期の遺構を検出したのは、TN93-3次・95-3次、および今回の調査である。前二者はそれぞれ『報告』I・IIが刊行されている[大阪市文化財協会1995・1997]。また、豊臣後期以後の遺構が検出された96-1次調査は『報告』IIIである[大阪市文化財協会1998a]。ここでは、この4地点に、少し南で徳川期の遺構が検出された01-1次調査の『報告』V[大阪市文化財協会2003]を加えて図上でつなぎ、豊臣期の様相を紹介する。なお、各調査地点には報告書の番号をとって、I~IIIおよびVの略号を付し、今回の調査地はVIとする。

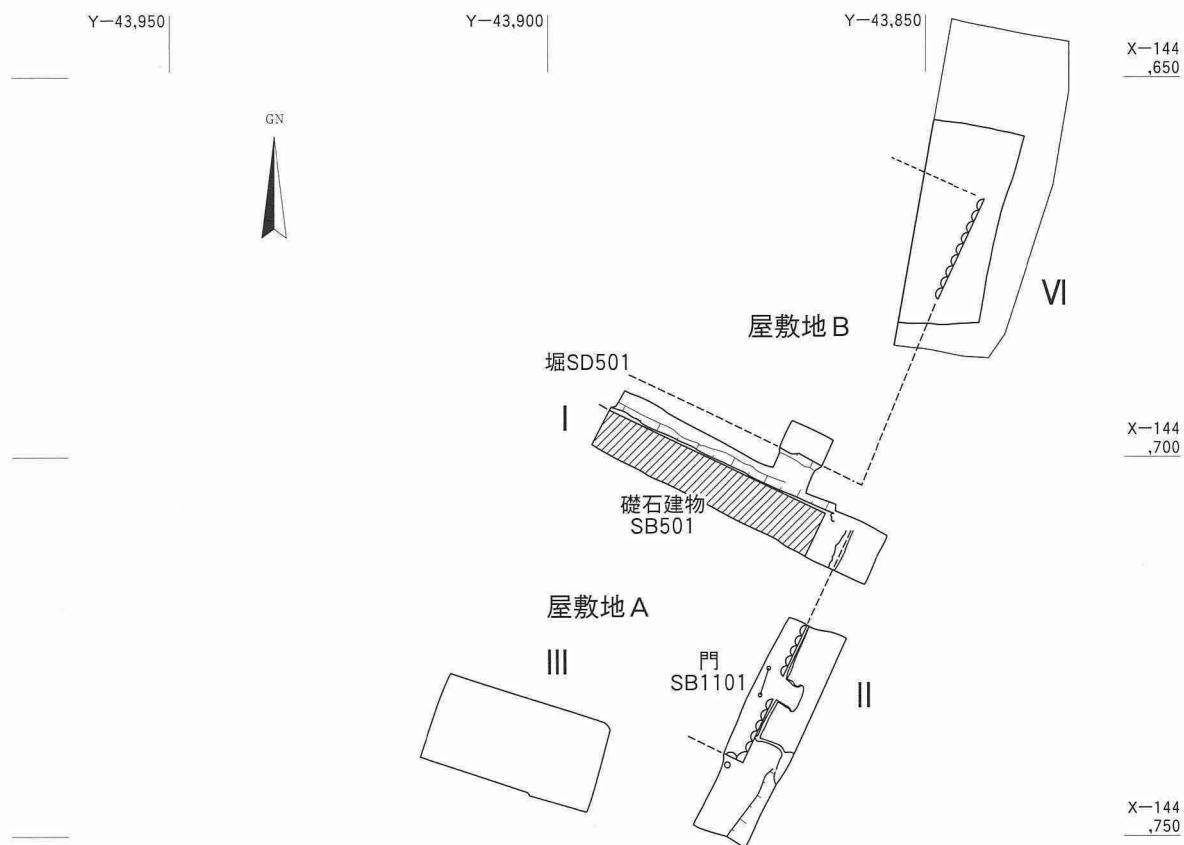
屋敷地造成前

これまでに見つかったもっとも古い遺物は各調査の最下層付近から出土したもので、12~13世紀の瓦器碗や東播系須恵器片口鉢のほか、龍泉窯系の青磁、丹波焼、備前焼、瀬戸焼などがあり、14~15世紀に降るものもある。ただ、いずれも屋敷地の造成前である粘土主体の水成層からの出土であり、中世の遺構に伴うものではない。水成層のレベルは、TP+0.8m以下で、東へ低く傾斜している。

豊臣前期の屋敷地造成

調査地I・IIでは豊臣前期の屋敷地を造成した盛土の下で、柵や溝、土壙などが検出されているが、それらの方向、位置などから、屋敷地の造成直前と考えられ、天満寺内町の建設が始まる1585(天正13)年以後の可能性も想定されている。

豊臣前期のある段階で、盛土と石垣による屋敷地が造成される。整地層(盛土)は東に厚く、最大1.4mに及ぶ。調査地Iには幅約5mの東西の堀SD501(以下、遺構番号は各報告書の番号どおり)があり、整地層はその南北に拡がる。南側には屋敷地の遮蔽を兼ねた長屋風の長大な建物SB501が建っていた。調査地IIでは2~3段で残存高1.2mの石垣が積まれ、これが整地層の東辺であった。この石垣には大川からの出入口となるスロープが取り付き、門SB1101が設けられていた。調査地I・IIで検出された屋敷地Aの南北幅は約35mである。1655(明暦元)年の「大坂三郷町絵図」に描かれた南北



※調査地VI以外は、座標値を世界
測地系に変換した(以下同じ)。



図25 豊臣前期の屋敷地

の堤などをもとにすると、東西幅は約55m(『報告』I)となり、その規模は約1,900m²となる。

一方、今回の調査地VIでは厚さ1.2mの盛土と石垣SW901が検出された。この石垣は調査地IIの石垣と微妙にずれるものの、ほぼ一直線に近く、一体的な計画性のもとで造成されたことがわかる。調査地内で石垣の北端が検出され、そこから西には細粒砂の偽礫(直方体)を積上げた土手SW902が築かれていた。土手と石垣で区画された北側の屋敷地Bの南限は、調査地Iの堀SD501とみられるので、その南北幅は約41mである。東西幅がやはり55mなら約2,300m²の規模である。

豊臣後期の屋敷地拡張

調査地VIでは石垣の東側に堆積していた水成層である第7層が、地震によって著しく変形を受けていた。これを1658(慶長3)年の慶長大地震の痕跡とみることは十分可能である。

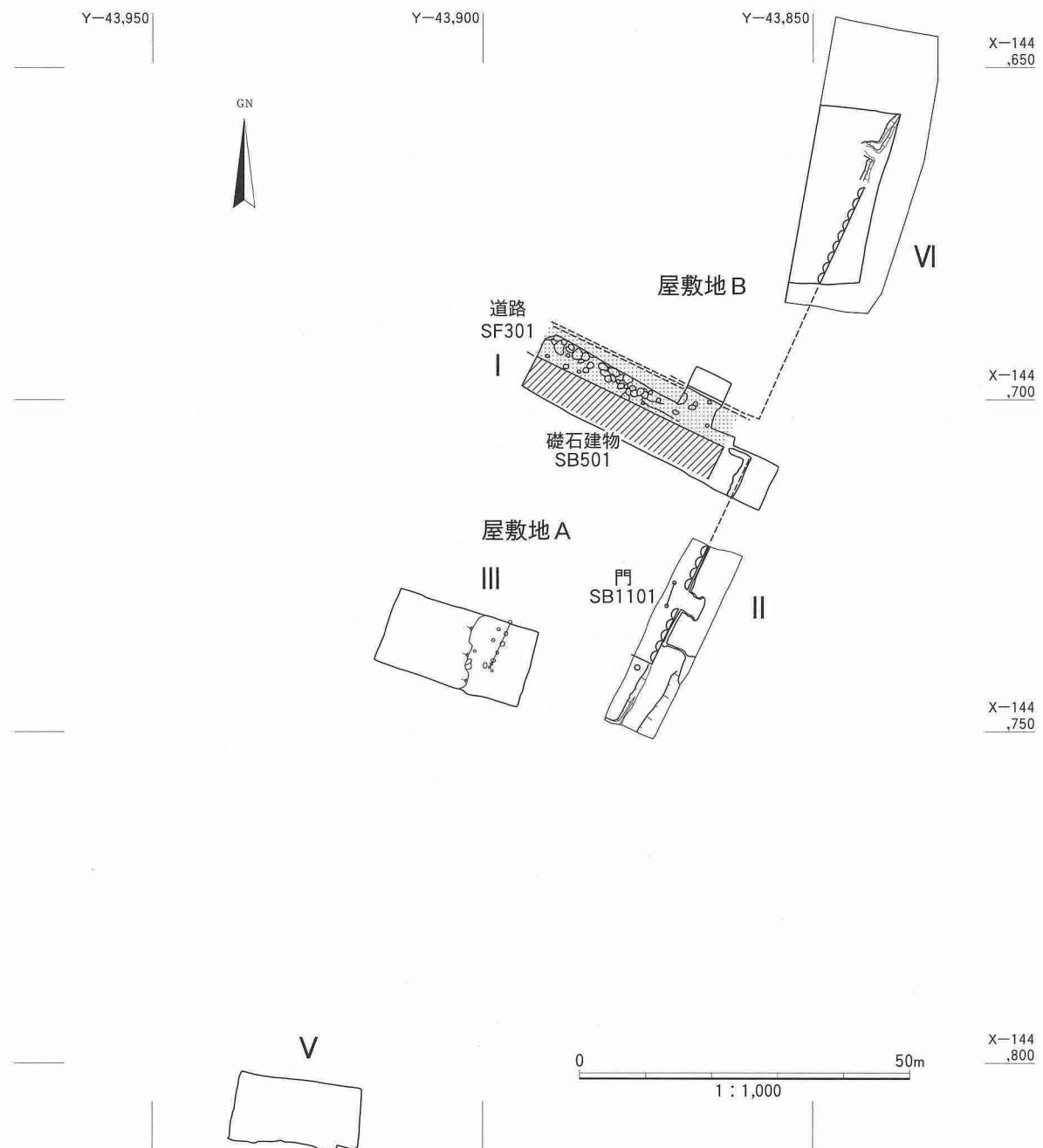


図26 豊臣後期の屋敷地(1)

大地震を契機に、大坂城三ノ丸と船場地域に城下町が建設された。それ以後の豊臣後期には上述の二つの屋敷地が拡張された。屋敷地Aでは、調査地IIの石垣のラインを南に延長して盛土が行われる。敷地の南北幅は45m以上、広さは約2,500m²以上となる(第1次屋敷地拡張)。その後、東辺でも大川に向って幅5~6mの盛土を行い、石垣や出入口は埋められてしまう(第2次屋敷地拡張)。それ以前からずっと低地のままであった調査地IIIでも盛土(土壇SX501)によって調査地I・IIと同じ高さになるが、なお低い部分が残った。

また屋敷地A・Bを区画していた堀SD501は埋められ、道路SF301にかわる。

屋敷地Bでも石垣の延長線上を北側へ盛土して敷地が拡張された。調査地VIのこの時の整地層の厚さは最大1.0mである。その結果、屋敷地Bの南北幅は50m以上、面積は2,800m²以上となった。こ

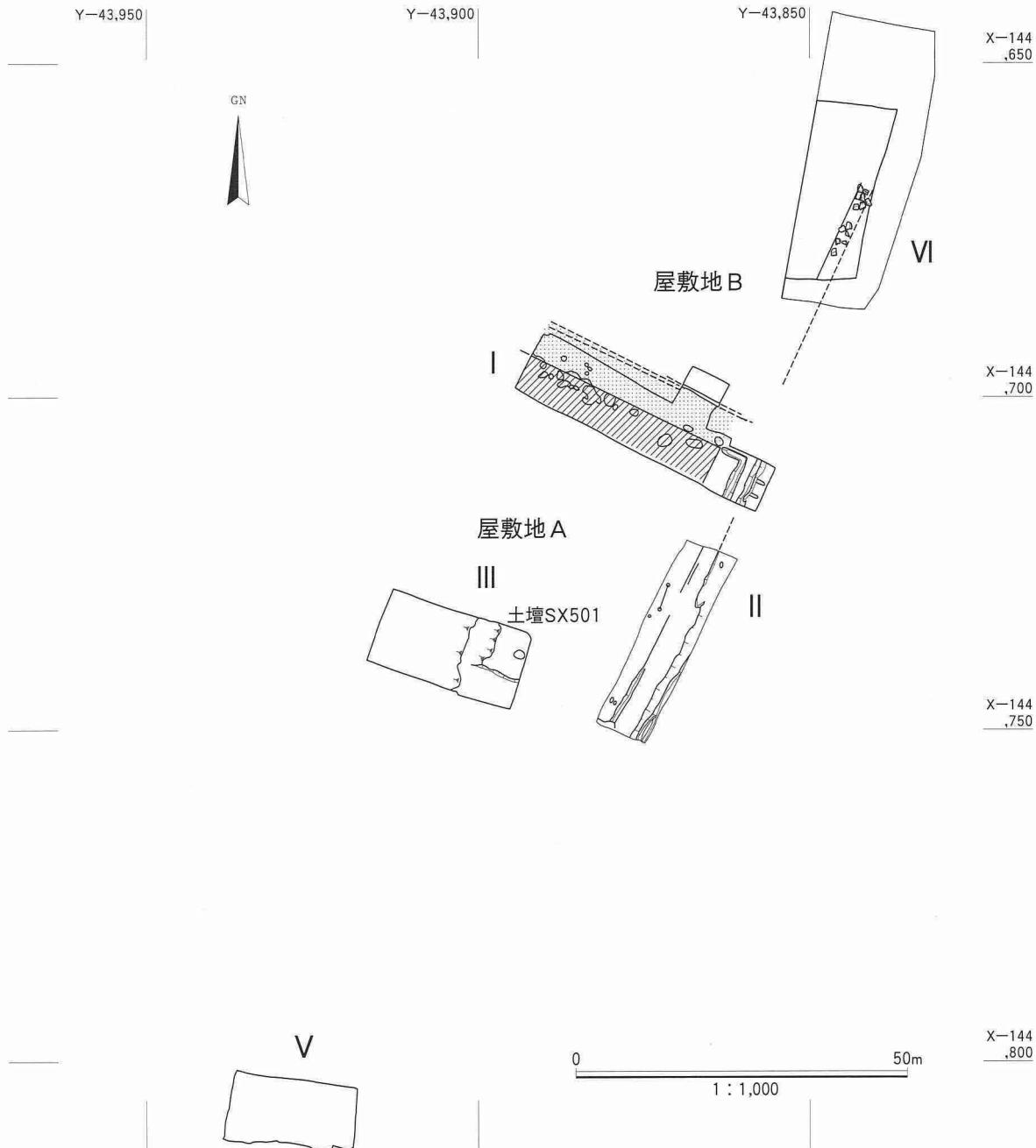


図27 豊臣後期の屋敷地(2)

の拡張部分の南から約6mの位置には幅約1.5mの出入口が設けられていた(第1次屋敷地拡張)。その後、東側にも盛土が行われて敷地が拡張され、石垣も大半が埋められた。この拡張は幅2m以下と、屋敷地Aより小規模である(第2次屋敷地拡張)。大坂冬ノ陣で天満が自焼したのはこの後のことである。

以上、豊臣期に限って屋敷地の変遷をたどってみた。さらに、本願寺が天満に存在した豊臣前期に絞ってみると、2つの屋敷地は石垣のラインを揃えるなど一体の計画性がみられることなどから、少なくとも当時の一般町人の居住地とは考えられない。ただ、町屋でないとしても、この屋敷地群が本願寺にかかわるものか、あるいは武家屋敷か、さらには何らかの公的施設(港湾施設など)なのか、様々な可能性がある。現状では決め手がなく、今後の調査に待つところが大であるが、本願寺跡である可能性が否定されているわけではない。

引 用・参 考 文 献

- 市川創2004、「天碧く雲たなびき一天満出土の高麗青磁ー」：大阪市文化財協会編『葦火』113号、p.8
- 大阪市文化財協会1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』I
1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』II
1998a、『天満本願寺跡発掘調査報告』III
1998b、『天満本願寺跡発掘調査報告』IV
2003、『天満本願寺跡発掘調査報告』V
- 大橋康二1989、『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 小田木富慈美2004、「古墳時代の天満」：大阪市文化財協会編『葦火』113号、pp.2－3
- 2005、「天満本願寺跡発掘調査(TM04－1)報告書」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・2003・2004)』、pp.13－32
- 黒田慶一1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96－1)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13－22
- 栄原永遠男1992、「難波における経済活動」：『奈良時代流通経済史の研究』搞書房、pp.137－173
- 佐藤隆2000、「学校法人福田学園による建設工事に伴う確認調査(TW98－1)」：大阪市文化財協会編『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.25－30
- 2001、「中世「渡辺津」をもとめて」：大阪市文化財協会編『葦火』第90号、pp.4－5
- 2002、「TJ00－2次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1999・2000年度、pp.181－190
- 積山洋1994、「上町台地の北と南－難波地域における古墳時代の集落変遷－」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.173－191
- 1999、「大坂の土師質土器」：『関西近世考古学研究』VII、pp.41－53
- 趙哲済2003、「同心町遺跡発掘調査(DC02－3)報告書」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.1－9
- 辻美紀2001、「株式会社大京による建設工事に伴う東天満1丁目所在遺跡発掘調査(HX99－1)報告書」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1999・2000年度、pp.25－31
- 松尾信裕2006、「上町台地周辺の中世集落」：『難波宮から大坂へ』 和泉書院、pp.151－154

あとがき

本書は造幣局構内の調査で6冊目の報告書となった。1冊目(1995年刊行)、2冊目(1997年刊行)までは相次いだ新発見の報告であり、その遺構が本願寺のものではないかとの見通しが得られたが、その後の約10年は、やや手探り状態であった。今回の報告によって、本願寺教団が天満に転入していた豊臣前期段階に、大規模な屋敷地がさらに北方にも展開していくことが判明した。これは大きな収穫である。とはいえ、まだ当地が本願寺の跡地であるといえるわけではない。その理由は本文で述べてあるので繰返さないが、今後さらなる調査の進展が期待されるところである。

だが、調査は厳しい時間的制約の下で行われた。そのため、本報告に不十分な点も多々あるが、ご容赦願いたい。最後に、現地での独立行政法人造幣局、大阪市教育委員会など関係各方面のご努力に感謝したい。

(積山 洋)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

あ 赤漆	12, 14	整地層	3, 6, 7, 9, 25, 27
い 石垣	1, 3, 5~7, 9, 10, 14, 25~28	胎土目	8, 20
		弾	10
石組	3, 16, 19	ち 朝鮮王朝陶磁	10
生駒西麓	19	朝鮮王朝白磁	3, 14
井戸瓦	23	て 出入口	7, 25, 27, 28
印判	20	と 砥石	14
か 華南三彩	10, 12, 14	土手	3, 6, 7, 10, 26
き 金箔押瓦	3, 12, 14	ふ 冬ノ陣	3, 5, 10, 14, 28
し 志野	3	ほ 堀立柱建物	1, 24
城下町	24, 27	や 矢穴	10
す 砂目	14	焼塩壺	8, 9, 14
せ 整地	3, 6, 7	屋敷地	6, 7, 25~28

〈地名・遺跡名など〉

お 大坂城	24, 27	と 同心町遺跡	1, 24, 25
て 天神橋遺跡	24, 25	ほ 本願寺	1, 2, 24, 25, 28

**Archaeological Report
of the
Tenma-Honganji Temple Site
in Osaka, Japan**

volume VI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 2006

February 2008

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SA : Palisade or Fence

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SW: Stone Wall or Soil Wall

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory Notes

Chapter I Outline of Research 1

Chapter II Results of Research 3

S.1 Stratigraphy 3

S.2 Research of Toyotomio Period(AD 1580-1615) 7

1) Features and Artefacts of Stratum 9 7

2) Features and Artefacts of Strata 7 and 8 7

3) Features and Artefacts of Stratum 5 10

S.3 Research of Tokugawa Period(AD 1615-1867) 14

1) Features and Artefacts of Stratum 3 14

2) Features and Artefacts of Strata 1 and 2 16

S.4 Sites of the Tenma Area and Transition of Features
at the Tenma-Honganji Temple Site 24

1) History of the Tenma Area Prior to Establishment
of the Tenma-Honganji Temple 24

2) Transition of the Features at the Tenma-Honganji Temple Site 25

References 29

Postscript

Index

English Contents

Reference Card

報 告 書 抄 錄

原 色 図 版

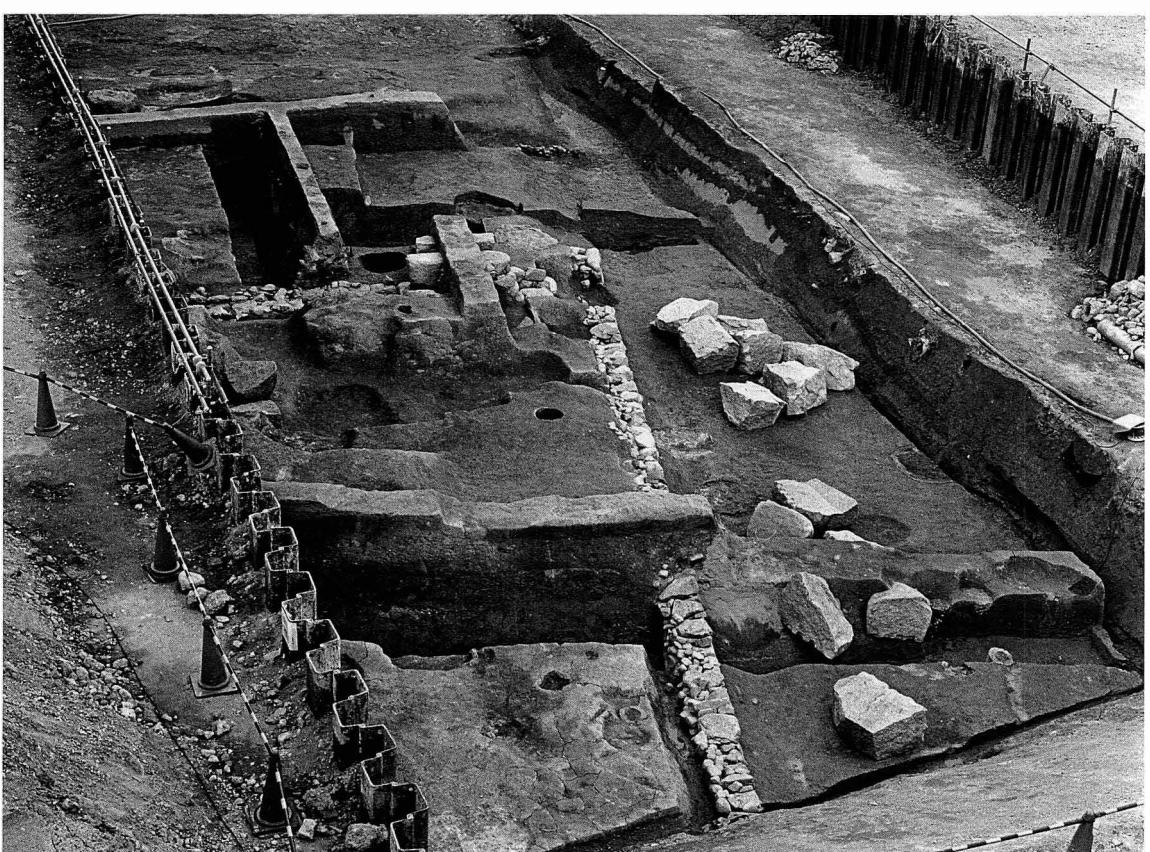


(南から)

図 版



調査地遠景(北から)



調査地近景(南から)

図版二 豊臣期の遺構（一）



石垣SW901(南東から)

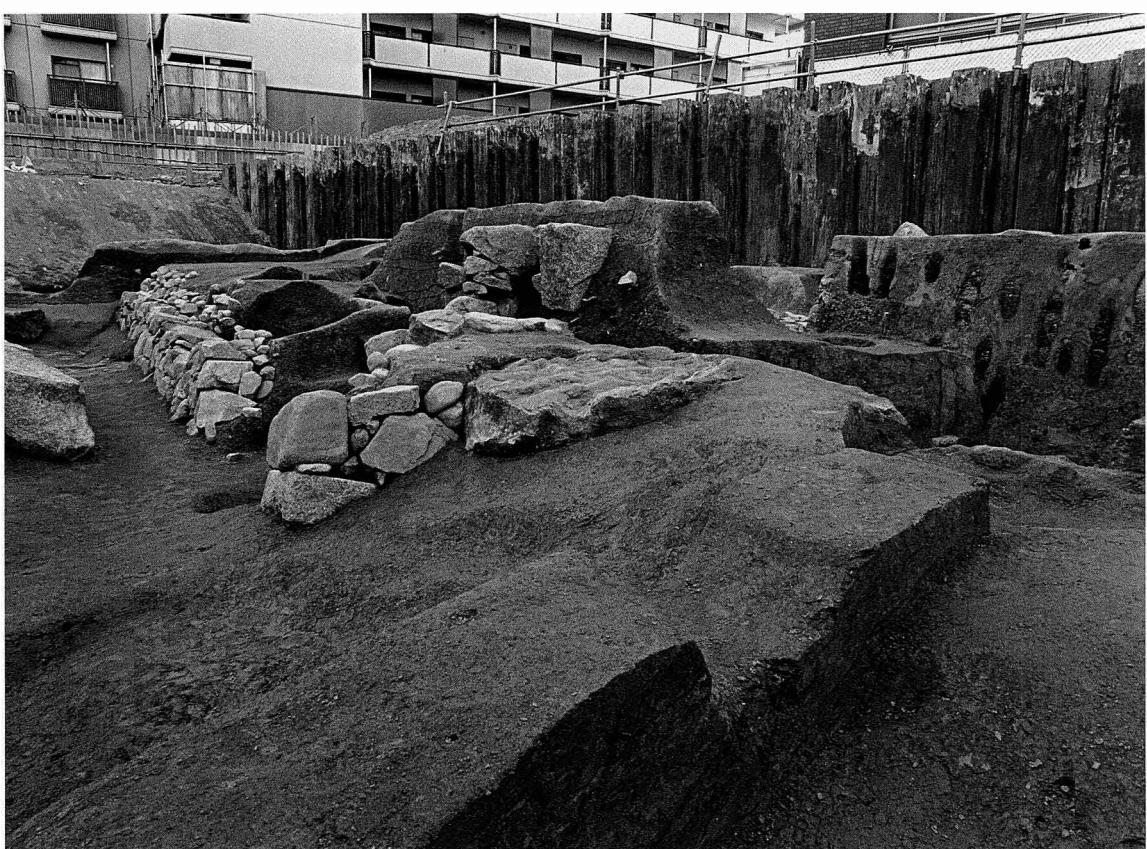


石垣SW901(北東から)

図版三 豊臣期の遺構（二）



石垣SW901(東から)

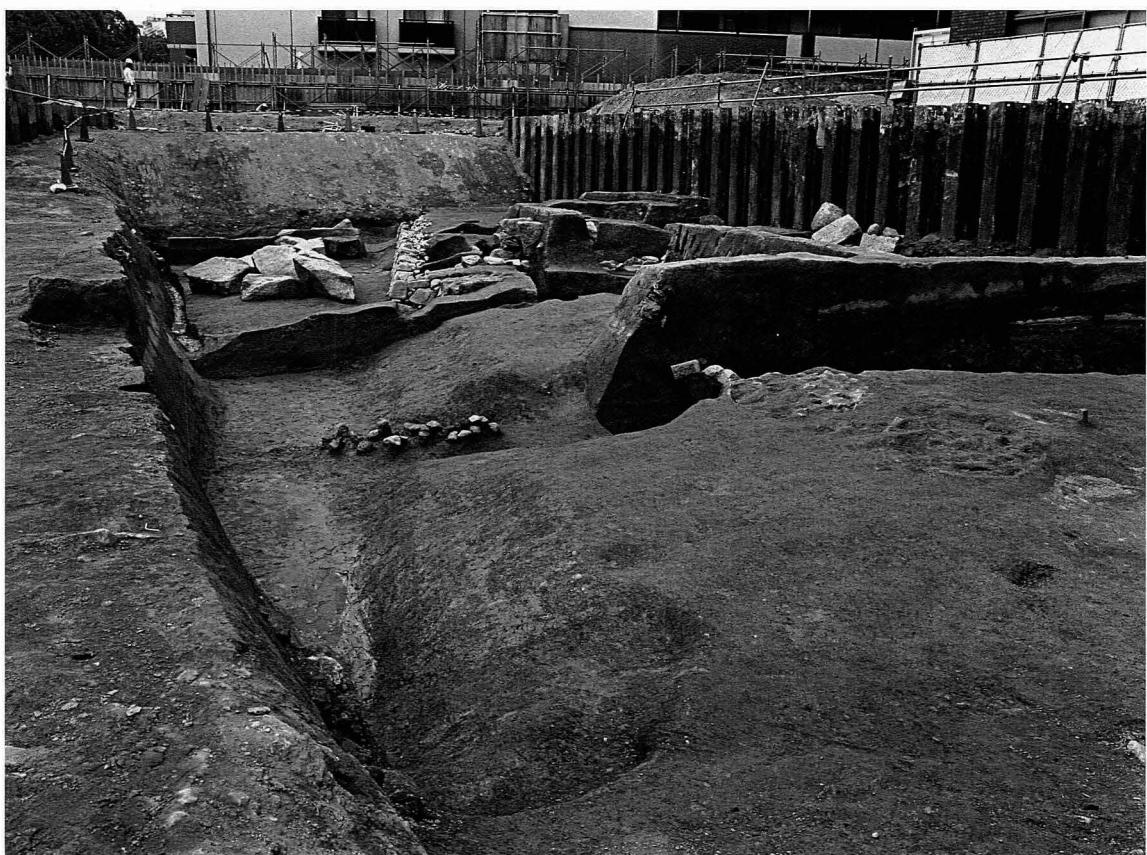


手前より土手SW801と石垣SW901(北から)

図版四 豊臣期の遺構(三)



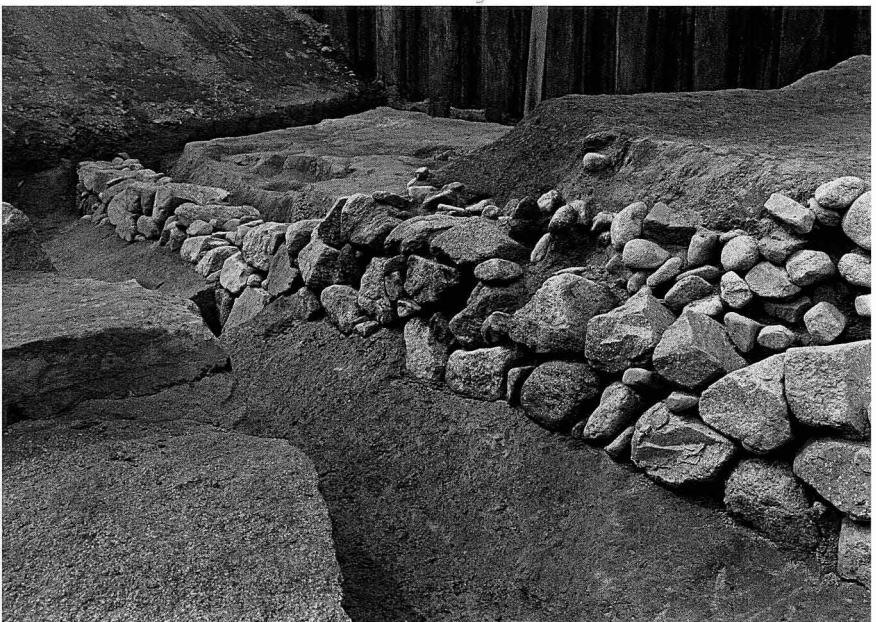
石垣SW901の北端(北東から)



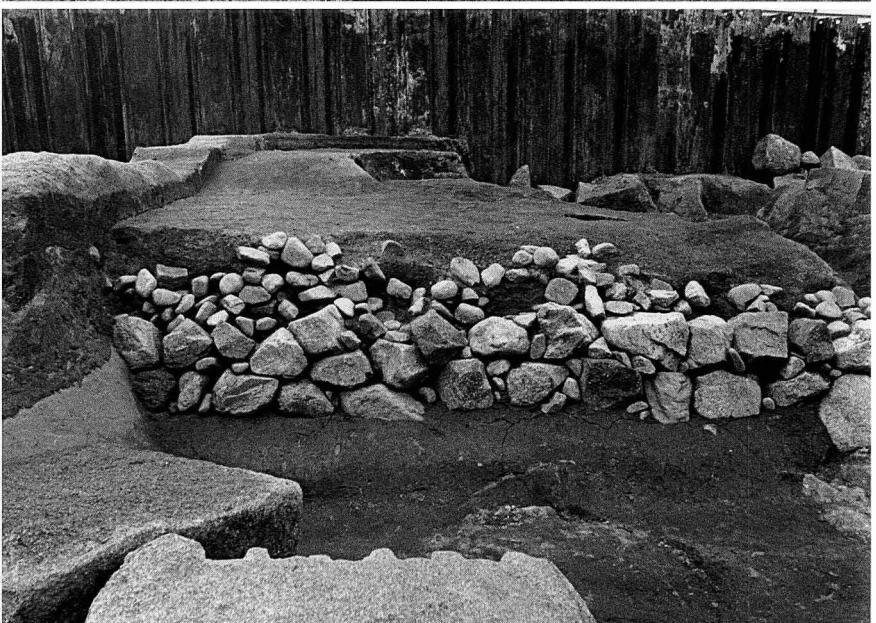
土手SW801(北から)

図版五 豊臣期の遺構（四）

石垣SW901の細部
(北東から)



石垣SW901の細部
(東から)



石垣SW901の細部
(東から)





石垣SW901の断面
(南から)



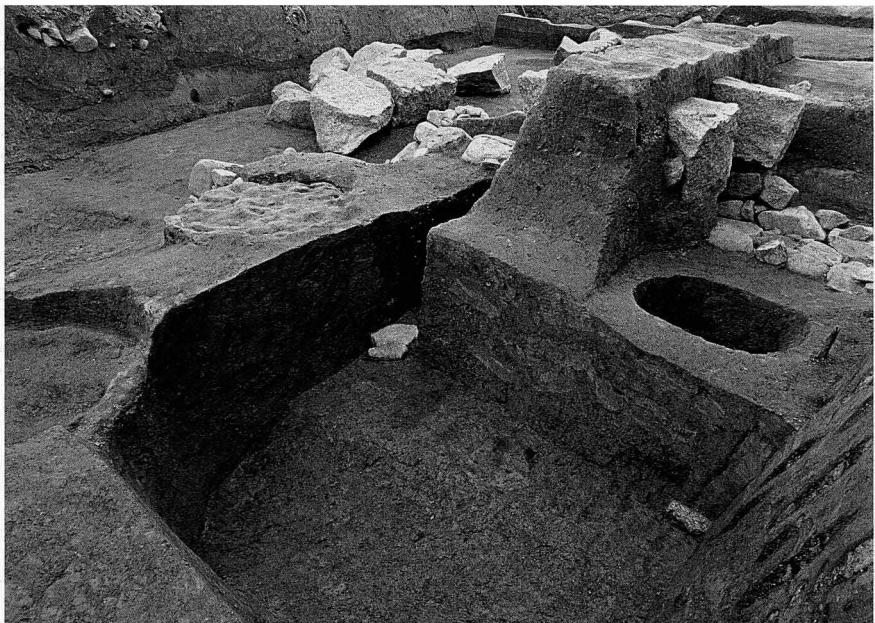
石垣SW901の断面
(南から)



土手SW902の断面
(西から)

図版七 豊臣・徳川期の遺構

土手SW902基底部の礎石
(北西から)



石垣SW901の東側
第6・7・10層と転石
(南から)



第3層上面の小溝群
(北東から)



図版八 德川期の遺構



SD202
(東から)

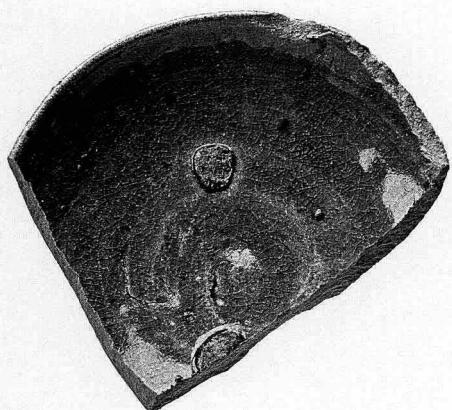
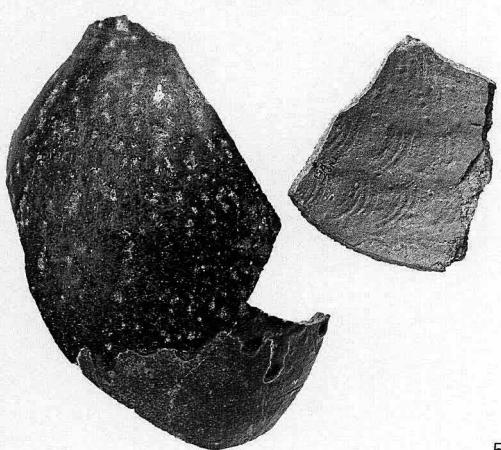
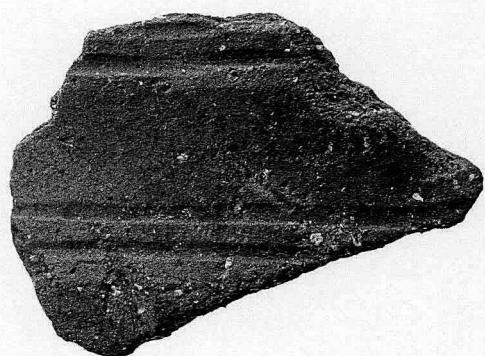


SD201
(東から)

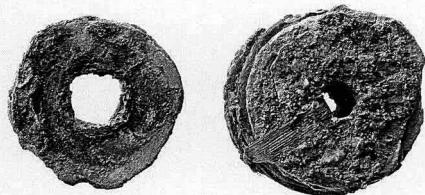


SD201とSD202の重なり
(東から)

図版九 豊臣期以前の出土遺物（二）



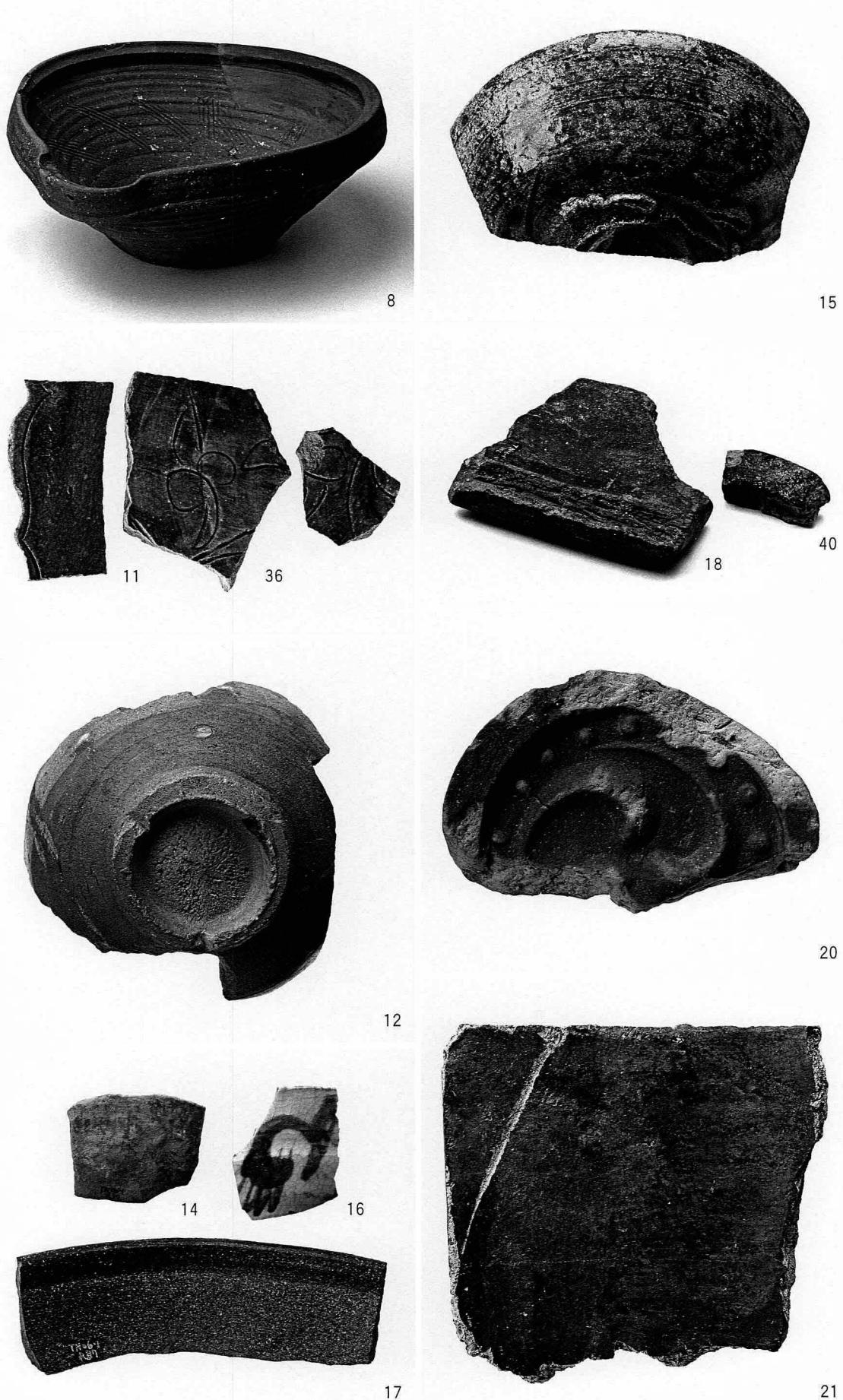
7



88

SK201(1)、第10層(2)、第8層(3～6)、SK801(7)、第7層(88)

図版一〇 豊臣期以前の出土遺物(二)

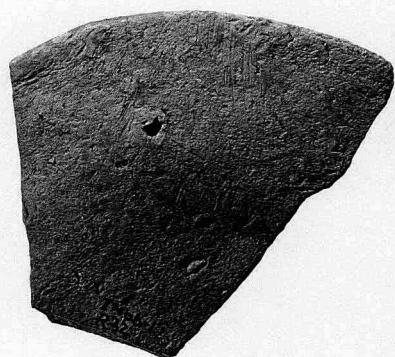


第8層(8・20)、第5層(11・12・18)、SD501(14~17)、第3層(36・40)

図版一 德川期の出土遺物（一）



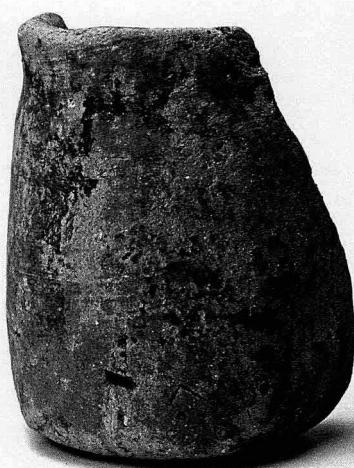
23



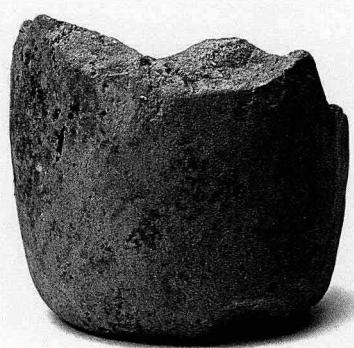
26



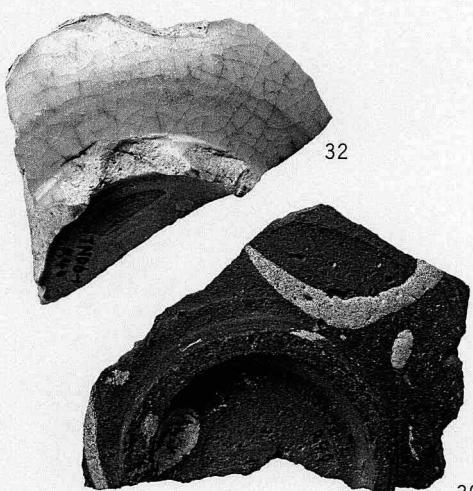
30



27

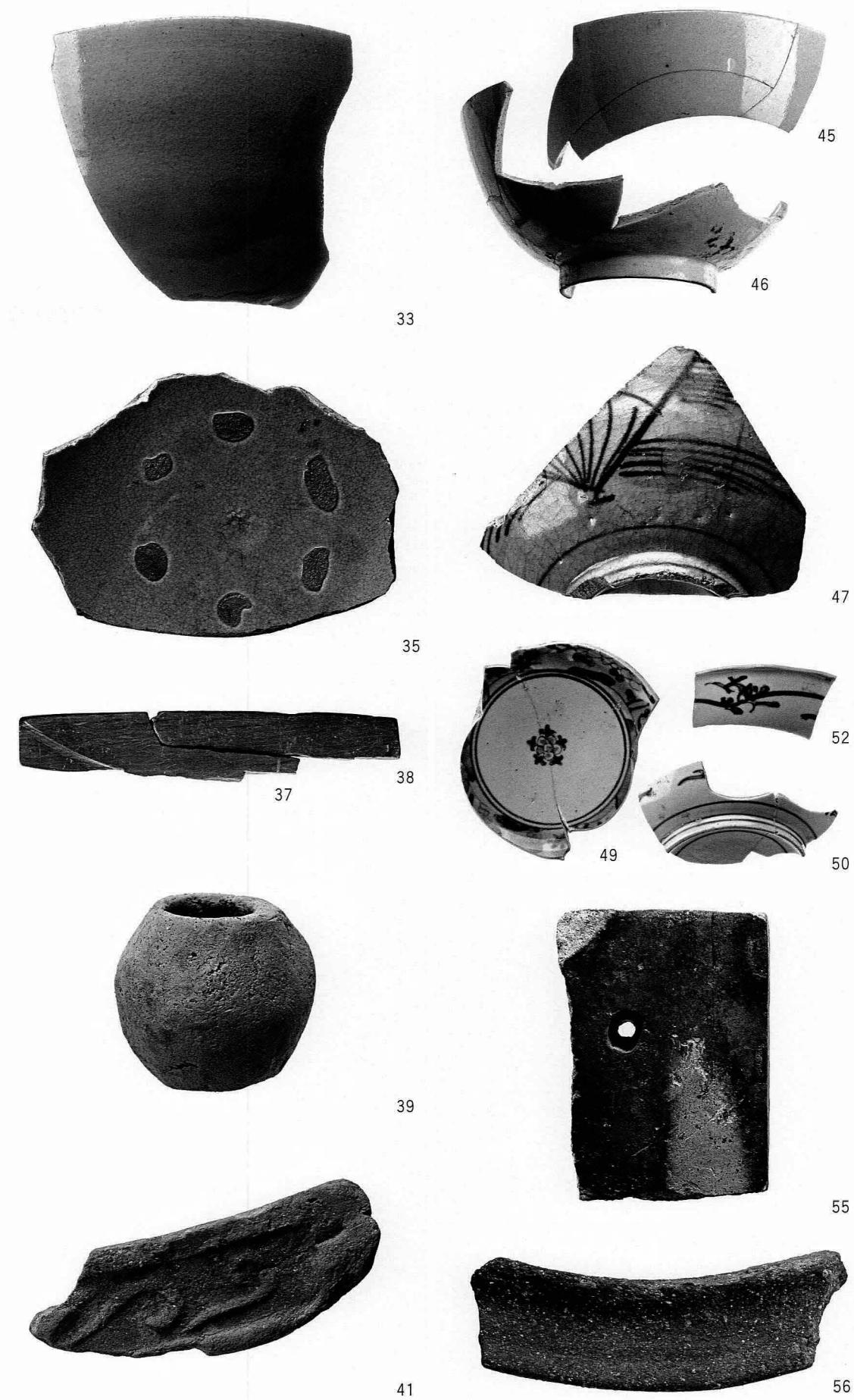


32



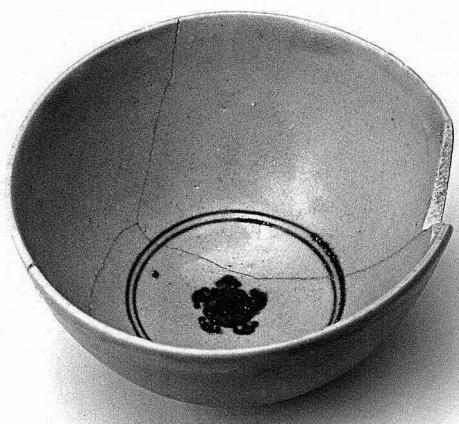
第3層(22~24・26・27・29・30・32)

図版二 德川期の出土遺物(二)

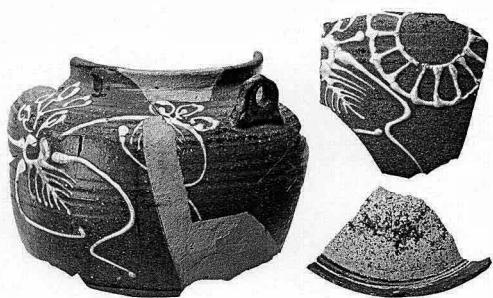


第3層(33・35・37~39・41)、SD201(45~48・49・50~52・55・56)

図版一三 徳川期の出土遺物（三）



57



62



58



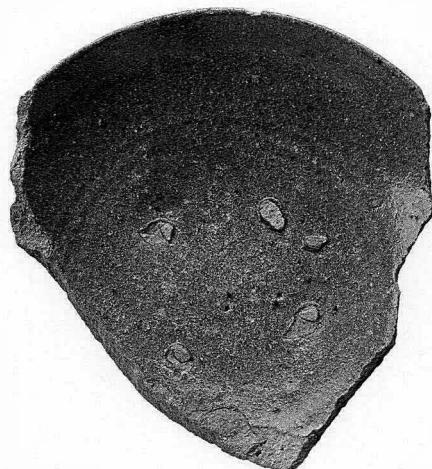
63



59



64



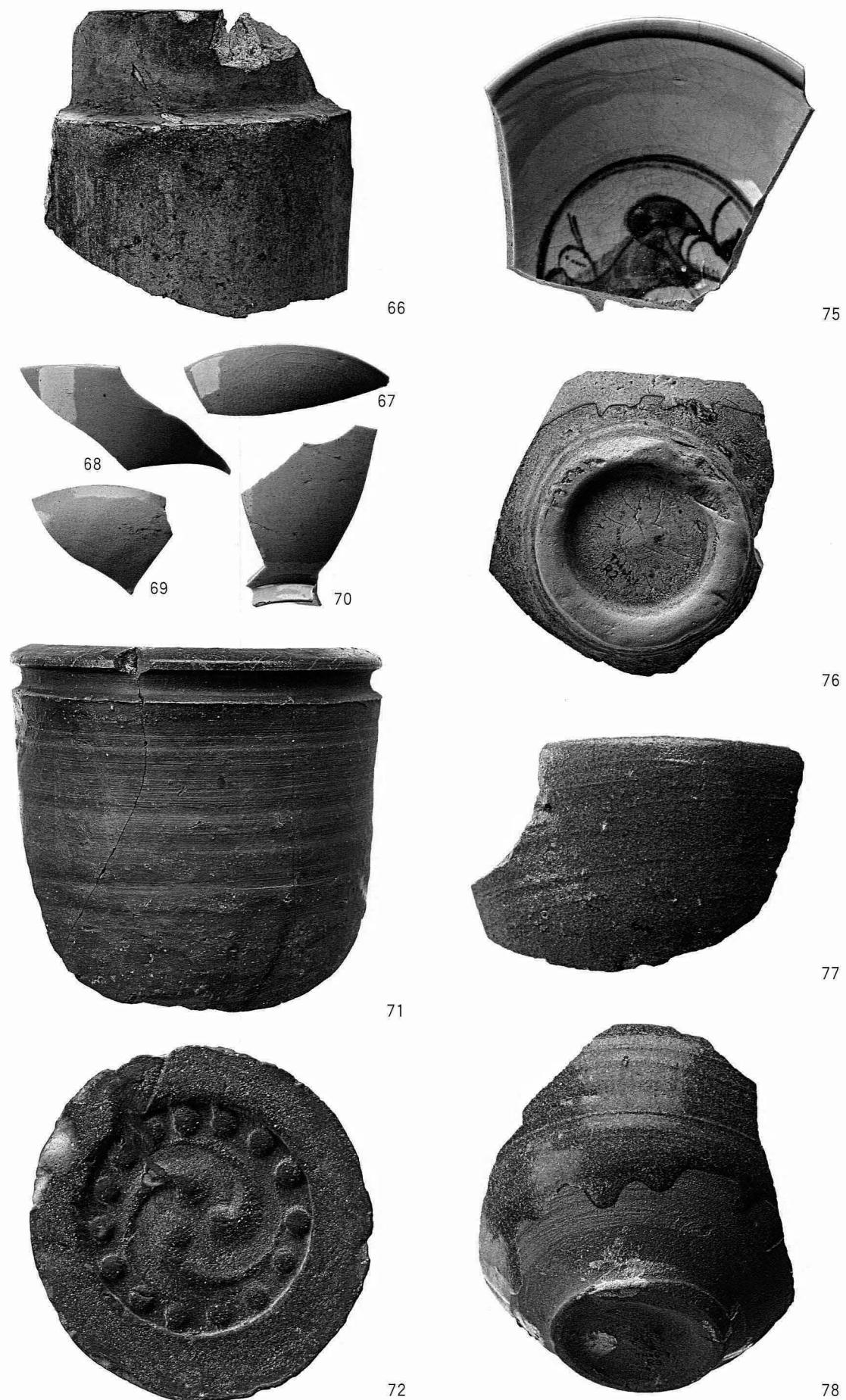
60



65

SD202(57)、SK203(58~60・62~65)

図版一 德川期の出土遺物(四)



SK204(66)、SK205(67~70)、SK206(71・72)、第2層(75~78)

大阪市北区 天満本願寺跡発掘調査報告VI

ISBN978-4-86305-003-7

2008年2月29日 発行◎

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Tenma-Honganji Temple Site
in Osaka, Japan**

volume VI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 2006

February 2008

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Tenma-Honganji Temple Site
in Osaka, Japan**

volume VI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 2006

February 2008

Osaka City Cultural Properties Association